秋田県文化財調査報告書第249集

秋田・昭和線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

── 大松沢Ⅰ遺跡 ──

１９９４・３

秋田県教育委員会

秋田・昭和線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

―― 大松沢（おおまつざわ）Ⅰ遺跡 ――

１９９４・３

秋田県教育委員会

遺跡遠景（南上空より）

序

豊かな自然に恵まれた秋田県には、我々の先人たちが営々と築き上げてきた歴史があります。文化財もその歴史遺産の一つであります。

このたび、秋田・昭和線地方道改良事業に伴い、周知の遺跡である大松沢Ⅰ遺跡の一部を発掘調査することとなりました。

調査の結果、縄文時代中期～晩期、平安時代等の遺構・遺物を検出しました。その中に縄文時代晩期の土器埋設遺構と、中央の小土坑を囲むように柱穴が配置される遺構（円形配置のピット）は、当時の墓跡と考えられるものです。後者の形態は特異で、墓制研究の上からも興味深い資料が得られたと言えます。

本書はこれらの成果をまとめたものであり、地域の歴史や文化を学習・研究する資料として、多くの方々にご利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査及び報告書作成に際し、ご協力いただきました秋田県土木部はじめ関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成６年３月

秋田県教育委員会

教育長　橋本顕信

例　言

1　本報告書は、秋田・昭和線地方道改良事業に係る大松沢Ⅰ遺跡の発掘調査報告書である。

2　自然科学的分析は下記の機関に委託した。

^{14}C年代測定 ----------学習院大学年代測定室

炭化材同定 ----------パリノ・サーヴェイ株式会社

3　本遺跡出土の陶器は、佐賀県立九州陶磁文化館　大橋康二氏に鑑定をお願いした。

4　本報告書に掲載した航空写真は、有限会社ＮＲＣ岩手空撮に委託して撮影したものである。

5　本報告書に使用した地形図は、国土地理院発行25,000分の1「秋田東部」、及び秋田市発行2,500分の1都市計画図「手形山」である。

6　調査並びに本報告書の刊行にあたって、次の方々より指導、助言を賜った。感謝申し上げます。(順不同、敬称略)

小松正夫・日野久・伊藤武士（秋田城跡調査事務所）

石郷岡誠一・西谷隆・安田忠市（秋田市教育委員会文化振興課）

五十嵐芳郎（秋田考古学協会員）

工藤雅樹（福島大学）

宮　宏明（余市町教育委員会）

武藤康弘（東京大学）

7　本報告書の執筆は、高橋　学が行い、松尾睦子の協力を得た。

8　調査に係る全ての資料は秋田県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

1　本報告書に収録した遺構実測図の方位は、真北（座標北）を示す。

2　本報告書に収録した遺構実測図の縮尺は、１／40を原則とし、適宜１／20、１／60縮尺も用いている。

3　遺物実測図の縮尺は、原則的に土器・剝片石器１／２、礫石器類１／３であり、それぞれにスケールを付している。

4　本報告書挿図中に使用した土色表記は、農林省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』(1976) に拠った。

5　挿図中の遺物実測図には、器種を問わず通し番号を付した。それらは、写真図版中の番号と対応する。

6　土層註記は、基本層位にローマ数字を用い、遺構堆積土にはアラビア数字を用いた。

7　遺構番号は、その種別を問わず検出順に連番としたが、精査過程において欠番となったものもある。

9　遺構の種別を表す略号は以下の通りである。

ＳＡ・・・・・柱穴列　　ＳＢ・・・・・掘立柱建物跡

ＳＤ・・・・・溝跡　　ＳＩ・・・・・住居跡

ＳＪ・・・・・土坑（焼成遺構）　　ＳＫ・・・・・土坑

ＳＮ・・・・・焼土遺構　　ＳＲ・・・・・土器埋設遺構

ＳＸ・・・・・円形（弧状）配置のピット

10　挿図中に使用したスクリーン・トーン、マークは以下の通りである。その他については、個々に凡例を示してある。

地山　　**焼土**

●：縄文土器　○：石器　△：土師器　☆：須恵器　＊：陶器

目　次

巻頭図版
序
例　言
凡　例
目　次
第１章　はじめに……1
　第１節　発掘調査に至るまで……1
　第２節　調査の組織と構成……2
第２章　遺跡の立地と環境……3
　第１節　遺跡の位置と立地……3
　第２節　歴史的環境……3
第３章　発掘調査の概要……7
　第１節　遺跡の概観……7
　第２節　調査の方法……9
　第３節　調査経過……10
第４章　調査の記録……13
　第１節　検出遺構と出土遺物……13
　第２節　遺構外出土遺物……29
第５章　自然科学的分析……39
　第１節　^{14}C年代測定……39
　第２節　炭化材樹種同定……40
第６章　まとめ……44
図版１～18

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

遺跡の所在する秋田市は、四方を豊かな自然に囲まれた美しい景観を誇る街である。一方、秋田市郊外での宅地開発等の急激な発展は、市民生活にさまざまな影響を与えており、特に朝夕のラッシュ時の交通混雑は、はなはだしいものとなっている。快適な市民生活を送るためには、歴史的な街並みと活力ある近代都市形成との調和を図り、時代を先取りした総合的な都市整備が必要であり、その基盤となる道路整備は必要不可欠なものである。

秋田駅東地区を南北に通る主要地方道秋田･昭和線は、秋田市手形山団地以南は既に整備が完了し、供用を開始している。以北の手形山団地から添川地ノ内間 1,587 m（手形工区）は、平成元年度から平成 10 年度の予定で事業が計画、実施されている。本工区（路線）内には、大松沢Ⅰ、大松沢Ⅱ、中山台の 3 遺跡の存在が秋田市教育委員会の詳細分布調査により明らかとなっている。(註1) このうち、中山台遺跡は直下を延長 276 mの手形山トンネル（仮称）が、遺跡の現状を変更することのない掘削工法で工事をすることから調査は不要となった。

大松沢Ⅰ・Ⅱ遺跡は、切土工法で道路が建設されることから、範囲確認調査後に記録保存すべきものについては発掘調査を行うことで原因者である秋田県土木部と秋田県教育委員会の間で合意した。

調査を担当する秋田県埋蔵文化財センターは、大松沢Ⅰ遺跡のうち用地買収の終了している区域の範囲確認調査を平成 4 年 10 月～ 11 月にかけて実施した。(註2) この結果、路線内に遺構・遺物が確実に広がりをもって分布することを再確認し、平成 5 年度に本調査をおこなうことになったものである。

第２節　調査の組織と構成

遺　跡　名	大松沢Ｉ遺跡　（略号：５ＯＭＺ－Ｉ）
所　在　地	秋田県秋田市手形字大松沢 100 － 55、手形字中台 53-1 新藤田字治郎沢 57 外
調 査 期 間	平成５年７月 26 日～ 10 月 15 日
調 査 目 的	秋田･昭和線地方道改良事業
調 査 面 積	２，５９０㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	高橋　学　（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
	松尾睦子　（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
総務担当者	佐々木真　（秋田県埋蔵文化財センター主査）
	佐藤広文　（秋田県埋蔵文化財センター主事）
調査協力機関	秋田土木事務所　秋田市役所　秋田市教育委員会文化振興課
	秋田城跡調査事務所　秋田市農協旭川支所・外旭川支所
	目白台新町町内会　添川町内会　松原町内会

註１　秋田市教育委員会『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』 1989 （平成元年）

註２　秋田県教育委員会「大松沢Ｉ遺跡」『遺跡詳細分布調査報告書』 1993 （平成５年） Ｐ 42 ～ 45

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と立地

大松沢Ｉ遺跡は、秋田市街地北東部の手形、新藤田に所在する。位置は、北緯39°44′15″、東経140°８′25″、ＪＲ秋田駅の北北東約2.7Kmである。

遺跡は、秋田市の東方に広がる出羽山地の一部である太平山地から派生する手形山台地の南西緩斜面に立地する。手形山台地は、標高97.5mの手形山を頂点としており、遺跡・調査区での標高は55m前後である。遺跡の位置する台地西側では数箇所で西方向に開口する沢の侵食が認められる。この沢水は、台地の北から西側を南流する雄物川の支流である旭川に集まる。

秋田市内では、これら河川により形成された段丘が５面分布している。(註１) このうち手形山台地は、下から３段目の中位面（$GtII^{+}$ 面）にあたる。同面は、表層部には褐色の粘土質火山灰層（段丘堆積物）があり、次いで最大径10cm位の礫を含む礫層と砂層があり、この下部には第三系の泥岩（船川層）や砂質シルト（笹岡層）で構成されている。なお、同地形面を関東の下末吉面に対比する研究者もいる。(註２)

第２節　歴史的環境

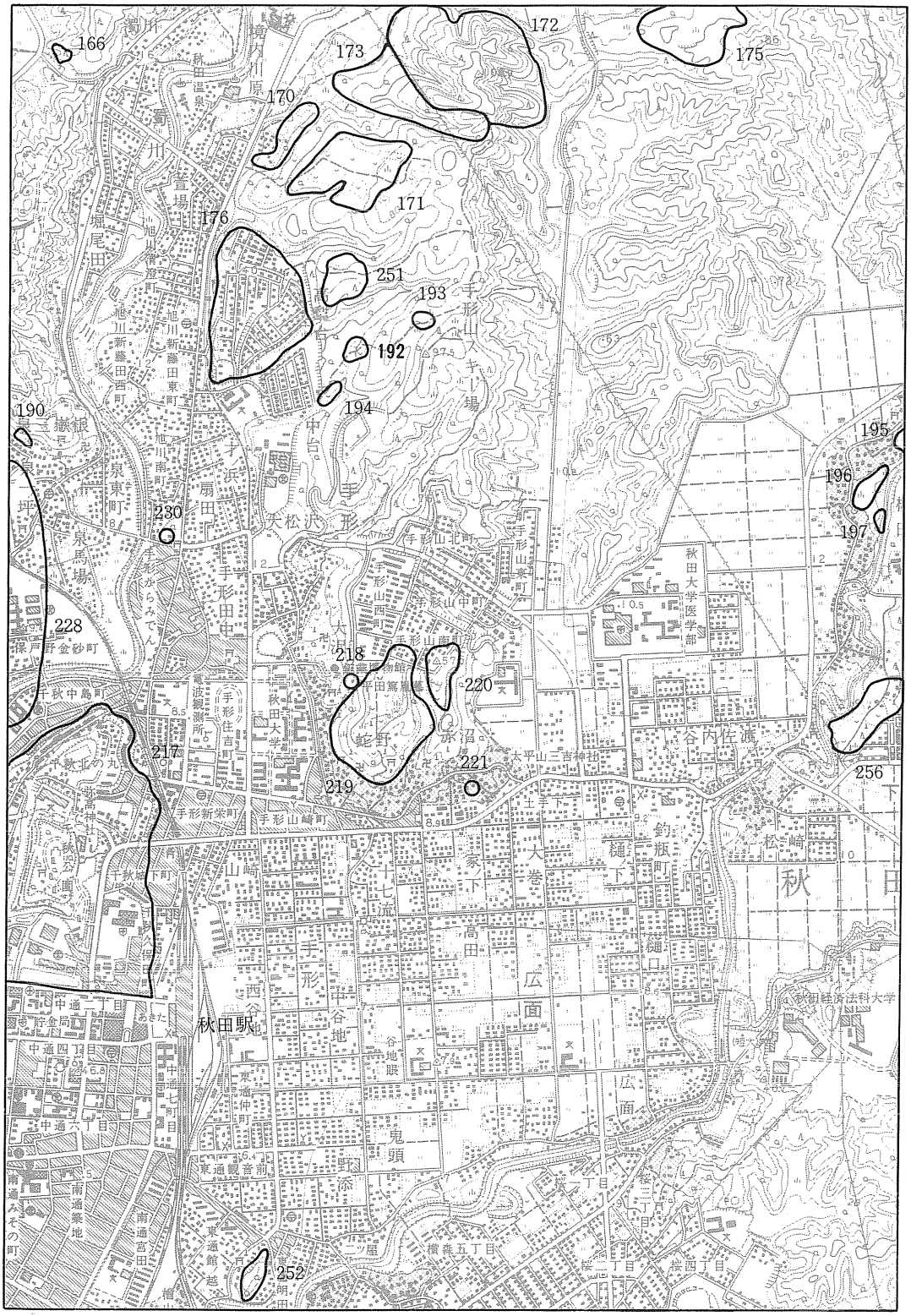
秋田市では昭和61年から３年かけて詳細分布調査を実施し、平成元年に報告書を刊行している。(註３) これによると市内で360ケ所の遺跡が確認されている。

第１図に示した本遺跡周辺の南北5.1Km、東西3.5Kmの図幅中には縄文時代から近世の遺跡・史跡が24登録、記載されている。ここでは図幅内に所在する主な遺跡を紹介する。なお、遺跡の次の（　）内の番号は、註３文献に登録されている番号であり、本書もこれに従った。

柳沢遺跡（220）は、本遺跡の南南東約1.3Kmに位置する。昭和49年に手形山団地造成に先立って発掘調査が行われ、縄文時代前期中葉～後葉の竪穴住居跡８軒等が検出された。うち一軒は長軸15mの長方形を呈する大型住居跡である。(註４)

手形山窯跡（193）は、本遺跡の北東約250mに位置する。昭和49年に秋田考古学協会による発掘調査が行われ、須恵器を焼成した窯跡２基を検出している。窯の操業時期は、８世紀後葉を中心とする時期と考えている。(註５)

久保田城跡（217）は、慶長８年（1603年）から９年にかけて築城された秋田藩主、佐竹氏の居城である。現在は、千秋公園として広く市民に親しまれている。同城跡は昭和63年に本丸



第１図　遺跡位置図（192＝大松沢Ⅰ遺跡）

の一角が、平成３～４年には二の丸の一角がそれぞれ現状変更に伴う発掘調査が行われている。(註６)

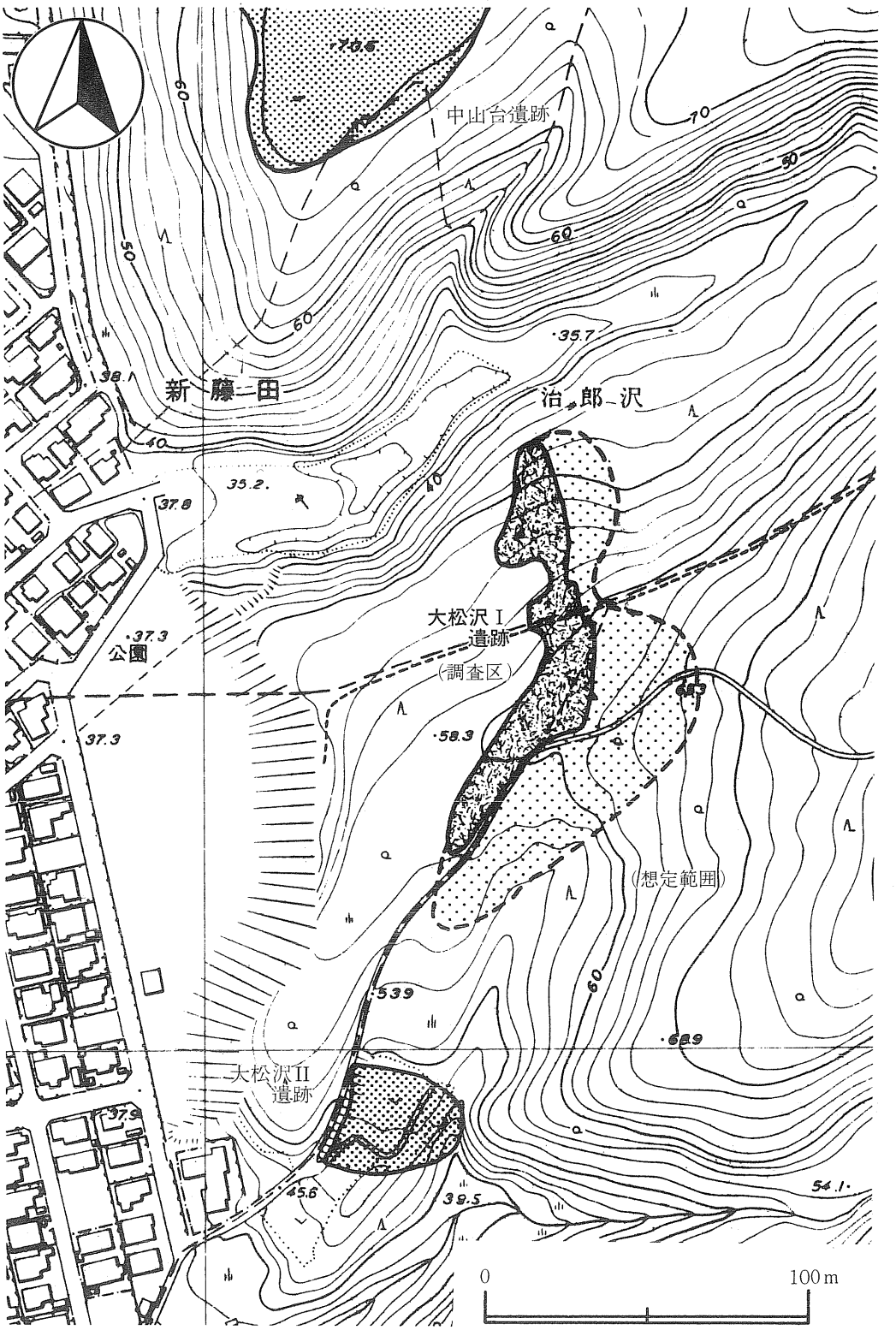
また本遺跡に隣接する大松沢Ⅱ遺跡（194）は、中世の遺物包含地として登録されているが、以前縄文土器（中期）も採集されていることから、２時期（時代）の複合遺跡の可能性もある。

註１　経済企画庁『土地分類基本調査　秋田』1966（昭和41年）
註２　内藤博夫「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」『第四紀研究』第４巻第１号 1965（昭和40年）
註３　秋田市教育委員会『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』1989（平成元年）
註４　冨樫泰時「秋田市柳沢発見の住居跡」『考古学ジャーナル』99　1974（昭和49年）
註５　秋田考古学協会『手形山窯跡』1975（昭和50年）
註６　秋田市教育委員会『久保田城－本丸御隅櫓跡発掘調査報告書－』1989（平成元年）
秋田市教育委員会『久保田城－佐竹資料館増築に伴う二の丸発掘調査報告書－』1992(平成４年)

第１表　大松沢Ⅰ遺跡周辺遺跡地名表

地図番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代・遺　構・遺　物
166	大堤	外旭川字大堤	縄文（土器）
170	地ノ内Ⅰ	添川字地ノ内	縄文（土器）
171	地ノ内Ⅱ	添川字地ノ内	縄文（土器）
172	天　館	添川字戸平川	中世城館（郭、腰郭、空堀、竪堀）
173	地ノ内館	添川字地ノ内	中世館跡（郭、腰郭、帯郭、空堀）
175	鶴木台Ⅲ	添川字鶴木台	縄文(土器）、古代(須恵器、赤褐色土器)
176	高梨台	新藤田字高梨台	縄文（土器、石器）
190	三嶽根	泉三嶽根、五庵山	縄文(土器)、古代(赤褐色土器)、中世館跡
192	大松沢Ⅰ	手形字大松沢	本文参照
193	手形山窯跡	手形字大松沢	古代（須恵器窯跡２基）
194	大松沢Ⅱ	手形字大松沢	縄文、中世（陶器）
195	佐渡端Ⅰ	柳田字佐渡端	縄文（石器）、古代（赤褐色土器）
196	佐渡端Ⅱ	柳田字佐渡端	古代（須恵器、赤褐色土器）
197	佐渡端Ⅲ	柳田字佐渡端	縄文(土器)、古代(須恵器、赤褐色土器)
217	久保田城跡	千秋公園等	近世城郭
218	平田篤胤墓	手形字大沢	近世墓地（国指定史跡）
219	蛇野	手形字蛇野	縄文（石器）、古代（赤褐色土器）
220	柳沢	広面字柳沢	縄文（竪穴住居跡、土坑）
221	桜田邸内	広面字赤沼	縄文（消滅）
228	一ノ坪条里制	保戸野八丁外	古代（条里制遺構）
230	如斯亭	旭川南町	近世庭園（秋田県指定文化財）
251	中山台	新藤田字中山台	古代（須恵器）
252	香奇館	東通明田	中世城館（帯郭、腰郭）
256	上崎	下北手松崎字上崎	古代（須恵器、赤褐色土器）

ここに記載した古代は、奈良・平安時代を指す。



第２図　大松沢Ⅰ遺跡と周辺の遺跡・地形

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

１　遺跡の微地形と現況

大松沢Ⅰ遺跡は、手形山台地の南西側緩斜面端部に立地するが、沢の開析等により微地形は大きく２つの様相を呈している。すなわち調査区中央北側（第５図の67～71ライン付近）に認められる小規模な沢の以北と以南である。

以北（およそ72ライン以北、最高位58.5m）は、北側の沢（治郎沢）に向って傾斜し、79ラインで最低位50.5mを測る。その先82ラインで一旦小丘状に盛り上がる（53m）ものの、以北は治郎沢に向って急傾斜している。治郎沢は、現在一部埋め立てられ団地が造られているが、ここでの標高は約35mである。発掘区域の字名は、新藤田字治郎沢、現況は、杉林である。

以南（およそ67ライン以南）は、北東から南西方向に突き出した狭い馬背状の尾根にあたる。標高は北東部で59.5m、南西部で57mとなり、南西方向に緩く傾斜する。尾根の南東側は南西に開口する沢で、北西側は段丘崖で画されている。なお、調査区中央部およそ56～67ラインは、現代の畑造成に伴う整地により平坦化された区域である。本来的には現況より、更に東が高く、西が低い地形を呈していたと思われるが、東側から切土して西側の斜面に盛土をし、平坦面を広く作りだしている。西側の盛土は、64ラインでの土層観察で1.4mにも及んでいる。現在、畑耕作は行われておらず、原野・杉林となっている。発掘区域の字名は、東側が手形字大松沢、西側が手形字中台となっている。

２　遺跡基本層序（第３図、図版４）

本遺跡における基本層序は、①調査区北部（ＭＤ77グリッド）、②中央部（ＬＳ57グリッド）、③南部（ＭＦ52グリッド）での観察記録を代表させる。土層は大略的に、Ⅰ層：表土・盛土、Ⅱ層：黒色腐植土層、Ⅲ層：地山漸移層、Ⅳ層：地山となるが、前項で述べた微地形の差異が層序にも反映しているようである。

①調査区北部（ＭＤ77グリッドで観察）

Ⅰ層：黒褐色土（10YR2/2）表土。層厚10～15cm、植物根多く含む。

Ⅱ層：黒色土（10YR2/1）層厚０～25cm、急傾斜地では本層は認められない。

Ⅲ層：暗褐色土（10YR3/3）～褐色土（10YR4/4）地山漸移層。層厚20～70cm。ａ層（暗褐色土10YR3/4）、ｂ層（暗褐色土10YR3/3）、ｃ層（褐色土10YR4/4）。緩斜面～平坦面（およそ

75～78ライン）でのみａ・ｂ層（平均層厚50cm）が観察できる。他ではｃ層のみである。多くの遺構確認面となる。遺物（縄文土器、土師器）も僅かながら出土する。

Ⅳ層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)～黄褐色土(10YR5/6)地山。砂礫を多く含む区域（北西部、標高約51.5m未満）と礫を殆ど含まない砂質粘土層の別がある。

②調査区中央部（ＬＳ57グリッドで観察）

Ⅰ層：表土・盛土。ａ層(褐色土10YR4/4～暗褐色土10YR3/4)現代の整地に伴う盛土、ｂ層(黒褐色土10YR2/3) Ⅱ層再堆積土、ｃ層（黒褐色土10YR2/2）旧表土。

Ⅱ層：遺物包含層。ａ層(黒褐色土10YR3/2) 灰色がかって見える。ｂ層(黒色土10YR2/1)炭化物少量含む。部分的に赤味がかって見える。層厚20～90cm。

Ⅲ層：暗褐色土（10YR3/3）地山漸移層。本土層観察地点（中央部南東隅）以外の大部分は、現代の整地により、Ⅱ・Ⅲ層が削平され、ごく浅い表土の下が地山となる。

Ⅳ層：黄褐色土（10YR5/6）～明黄褐色土（10YR6/6）地山。

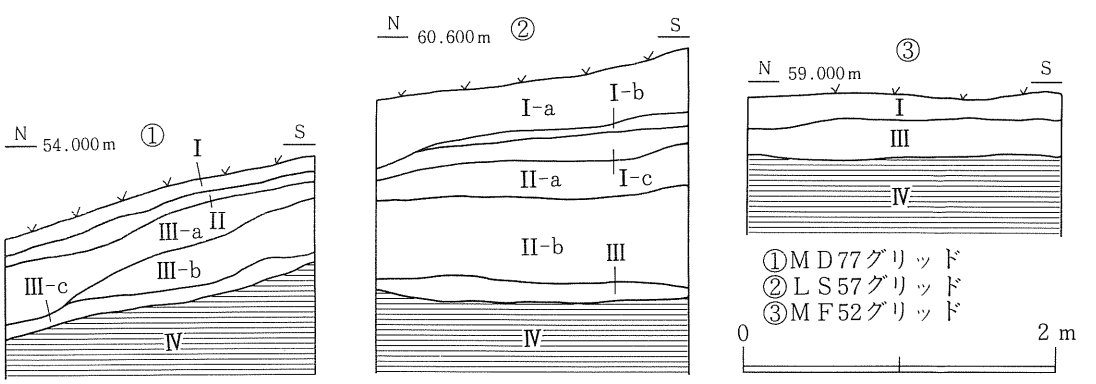
③調査区南部（ＭＦ52グリッドで観察）

Ⅰ層：黒褐色土（10YR2/2）表土。層厚10～15cm、植物根多く含む。

Ⅱ層：暗褐色土(10YR3/3)～褐色土(10YR4/4)地山漸移層。層厚15～25cm。遺構確認面。

Ⅲ層は、調査区中央～南部の大部分で現代の削平、畑耕作により失われている。

Ⅳ層：黄褐色土（10YR5/6）～明黄褐色土（10YR6/6）地山。



第３図　遺跡基本層序

第２節　調査の方法

１　調査区の設定

発掘調査は、遺跡内に打設されている道路中心杭Ｎｏ.38を原点として、真北（座標北）方向に延ばした南北基線と、これに直交する東西基線からなる４ｍ×４ｍの方眼を設定するグリッド法に拠っている。方眼杭は、東西方向に東からＬＱ、ＬＲ、・・・ＭＡ、ＭＢ、・・・ＭＨ、ＭＩ、ＭＪのアルファベット２文字をあて、南北方向には南から北に向かって昇順となる連続した２桁の数字をあて、その両者の組み合わせをグリッド名とした。方眼杭に囲まれたグリッドの呼称は、その南東隅に位置する杭を代表させている。原点である杭は、ＭＫ50となる。

２　野外調査

検出した遺構は、その種別を問わず、一連の番号を付している。番号登録の後、遺構と断ずることのできなくなったものは、これを欠番としている（凡例参照）。

遺構・遺物の実測は、グリッド杭を基準とする簡易遣り方測量を採用している。遺構平面図は、基本的に１／20とし、土器埋設遺構など規模の小さい遺構は１／10とした。

遺物は、全点の出土地点を計測し、遺物取り上げ台帳に記載した。記載の項目は、１．遺物番号、２．種別、３．出土グリッド、４．Ｘ座標、５．Ｙ座標、６．Ｚ座標、７．取り上げ月日、８，備考である。Ｘ座標は、基準となるグリッドの座標から西への距離、Ｙ座標は、同じく北への距離、Ｚ座標は標高を示す。

遺構写真は、35mm判カメラに、モノクロ、カラースライドのフィルムを装着し、必要に応じネガカラーを用いている。また全景写真にはラジコンヘリコプターも使用している。

３　室内整理

現地で作成した遺物取り上げ台帳の整理及び遺物平面分布、垂直分布図作成には、パーソナル・コンピューターを使用した。作成に使用したプログラムは、吉田真『遺物管理プログラムver1.0』である。

遺物の実測にあたっては、一部の個体（剝片石器）を写真実測している。写真実測用の写真撮影を委託し、実物大に拡大した写真を基に実測・トレースを行っている。

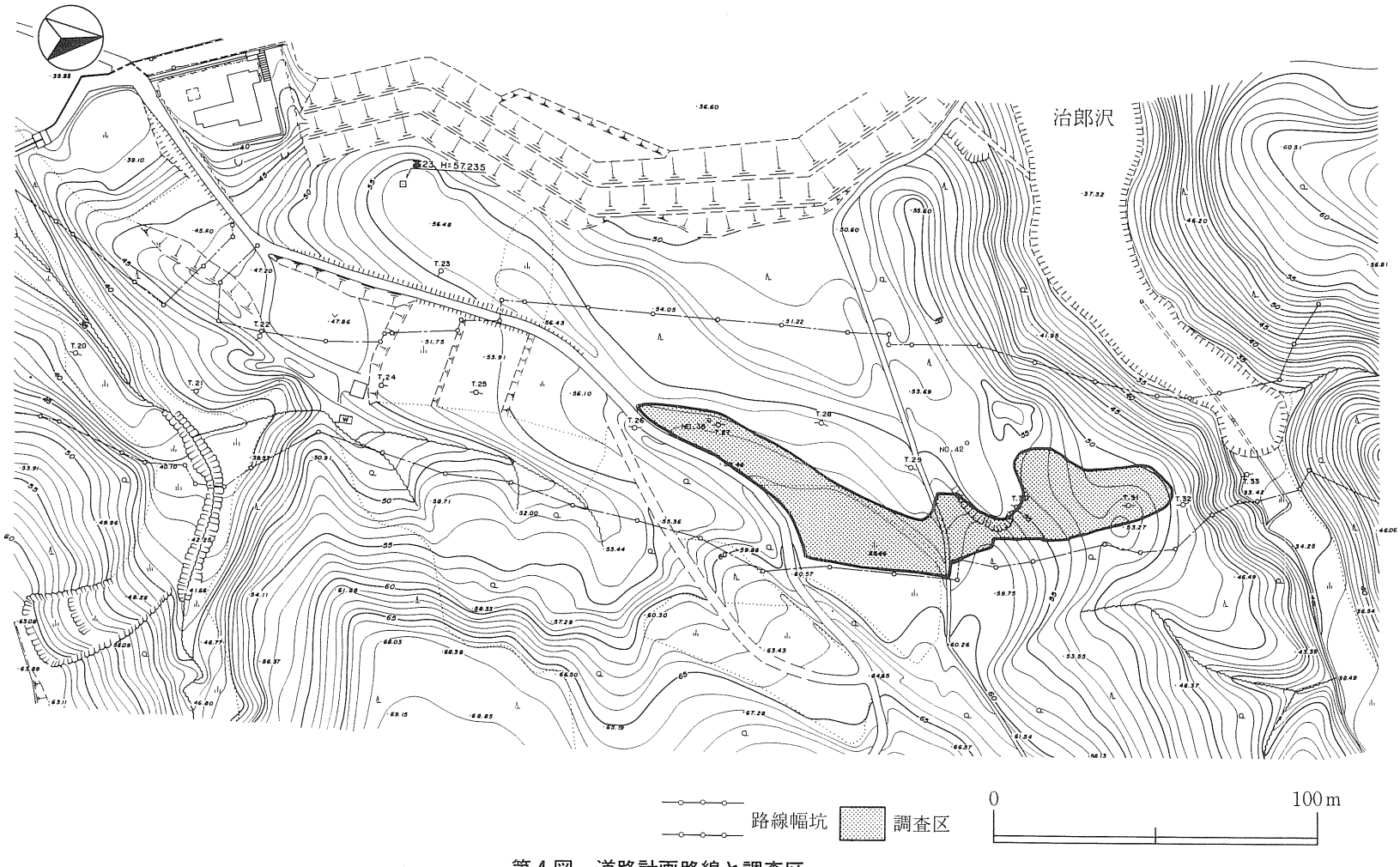
報告書に掲載した遺物の写真は、35mm判カメラにマイクロレンズ（55mm）を装着し、撮影したものである。

第３節　調査経過

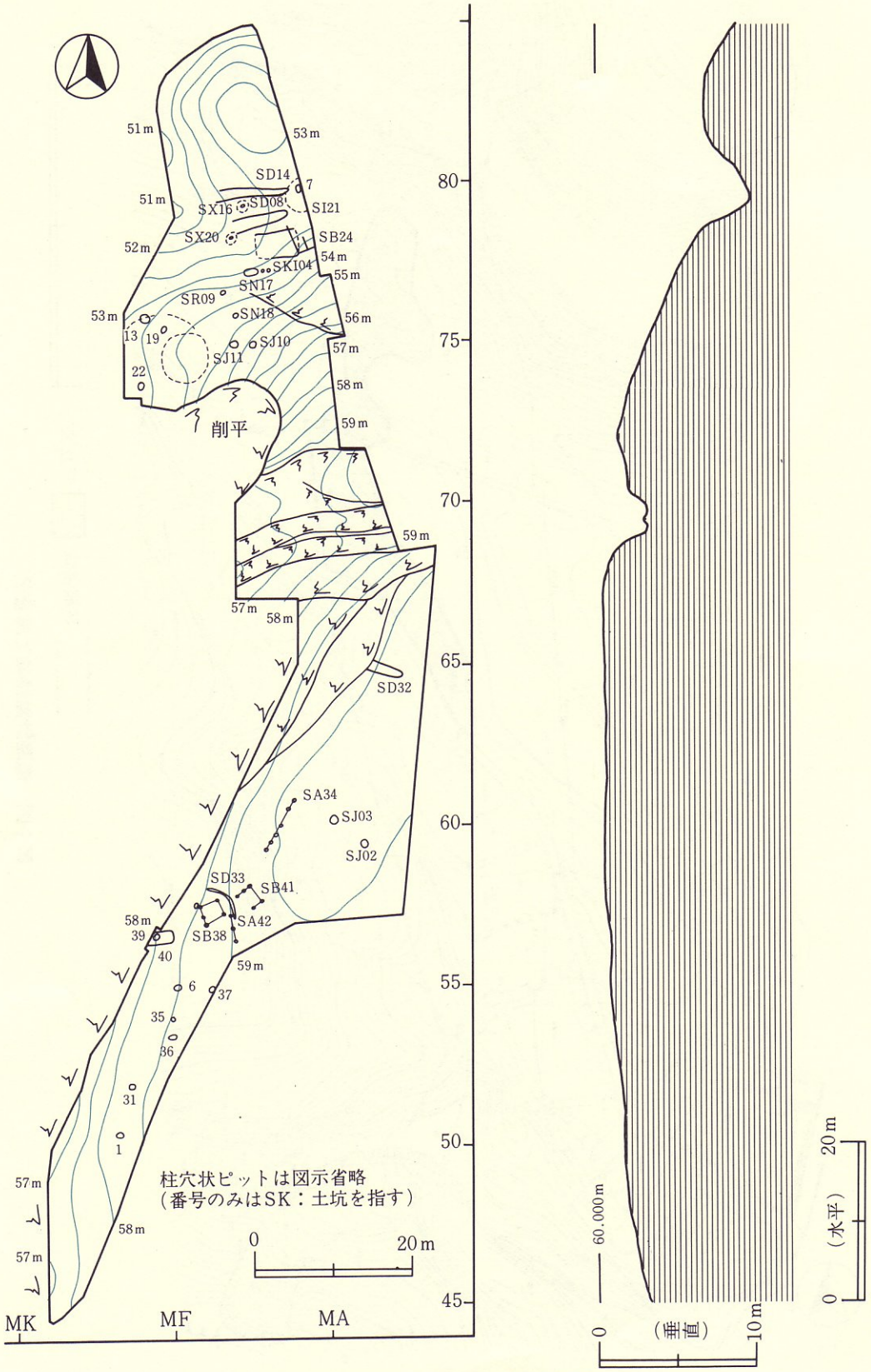
発掘調査は、７月26日から10月15日まで行った。調査の経過は、一覧表化し、第２表に示した。表は縦軸に週単位の日付を、横軸には調査準備等、表土除去、遺構検出、遺構精査、実測等の工程、及び調査区域を南部、中央部、北部の３つに分けた上で棒グラフ状に記した。

第２表　調査経過

週	日付	調査準備等	表土除去	遺構検出	遺構精査	実測等
1	0726～0730	26 下草刈 2				
2	0802～0806		3 南 11			
3	0809～0813	盆休み 12 17				
4	0816～0820		中央 18 北 19 24			
5	0823～0827			南 26 中央 24 北 26 30 1		25 基本層序作成 31
6	0830～0903				南 1 北 2	
7	0906～0910		10			北 9
8	0913～0917					
9	0920～0924		中央 20 22 北 24	24		
10	0927～1001		29			
11	1004～1008				南 6 中央 6 8 5	中央～南
12	1012～1015	15 撤収			14	コンタ図 14 15 15 空撮 14



第４図　道路計画路線と調査区



第５図　遺構配置図・調査区縦断側面見通し図

第４章　調査の記録

第１節　検出遺構と出土遺物

本調査で検出した遺構は、住居跡１軒、竪穴状遺構２基、土坑15基、掘立柱建物跡３棟、溝状遺構４条、柱穴列２列、焼土遺構２基、土器埋設遺構１基、円形（弧状）配置のピット２基、その他柱穴状ピット約450基を数える。

これら遺構の構築時期は、出土遺物、堆積土の状態から、１．縄文時代晩期、２．現代、３．時期不明に分けられる。時期不明の遺構は、出土遺物がなく明確ではないが、周辺出土の遺物、遺構の形態から、縄文時代、平安時代及び中・近世、現代のいずれかと思われる。

１　縄文時代の遺構

該期に属する遺構は、調査区北部の土器埋設遺構と円形（弧状）配置のピットである。遺構確認面は、地山漸移層面（Ⅲ層）である。

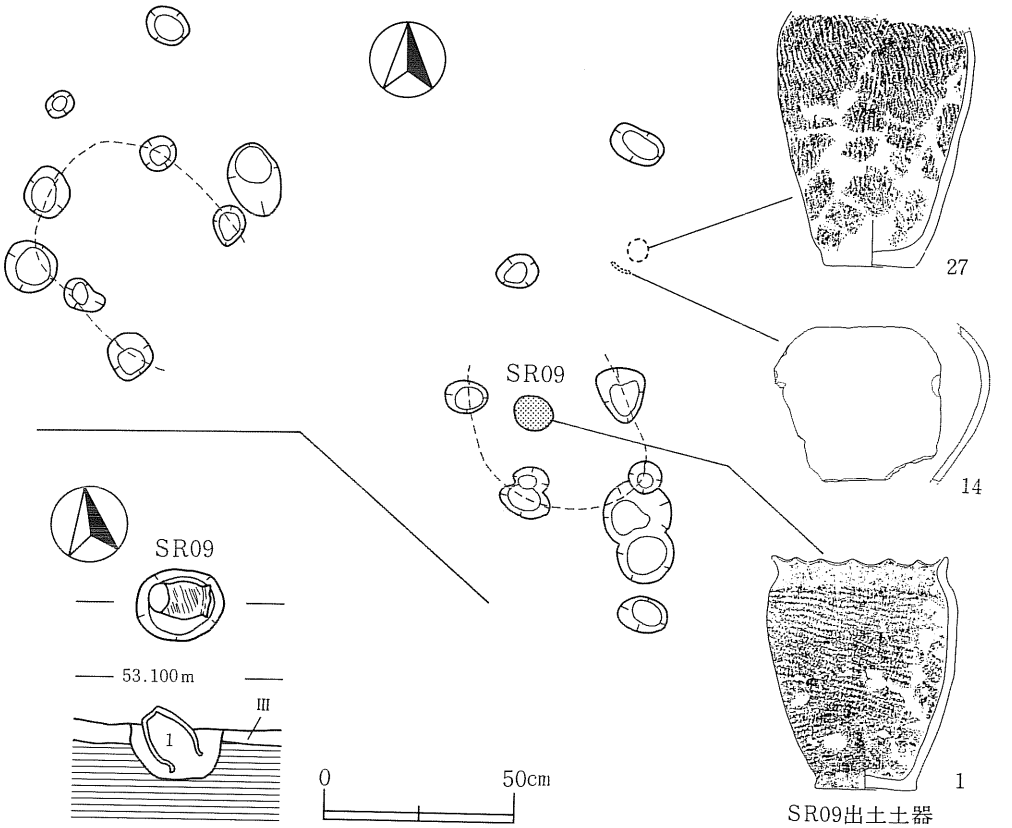
ＳＲ０９土器埋設遺構（第６・７図、図版５）

ＭＤ76グリッドで確認した。縄文土器の底部が検出され、周囲を精査したところ、長さ48cm、幅38cmの小土坑に鉢形土器が埋められていることが判明し、土器埋設遺構として登録したものである。土器は倒立状態であったが、土圧の関係からか西側に幾らか傾いている。

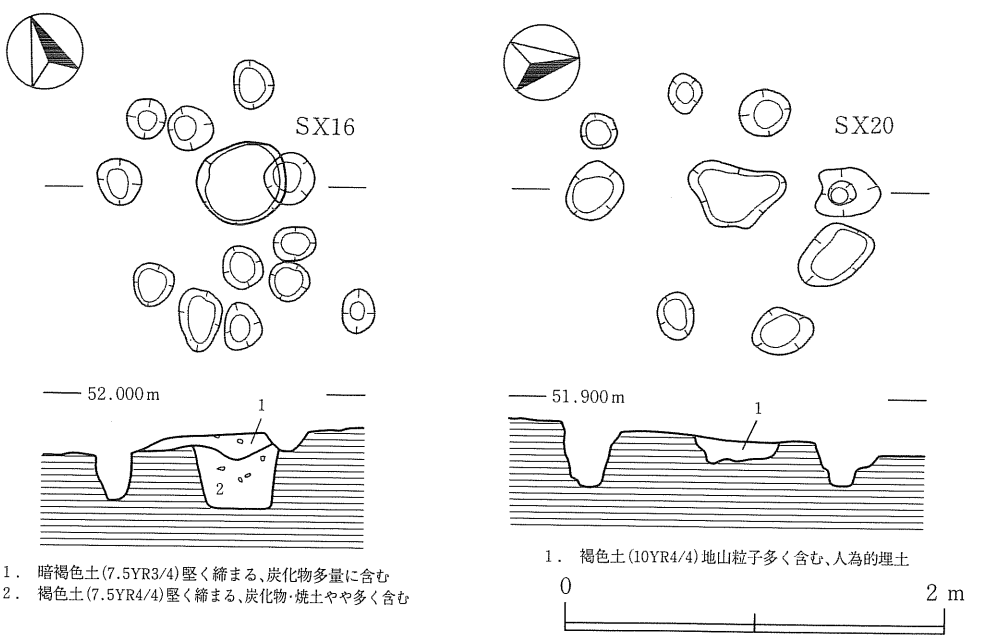
第７図１は頸部で緩く内屈し、口縁部で短く外反して立ち上がる鉢形土器である。口縁は緩い山形波状を呈する。地文はＬＲ縄文で、縦位回転施文している。頸部から上は磨消を行っている。胎土に多量の砂粒を含み、外面胴部中位から上には煤状炭化物が厚く付着している。色調は、明褐色である。器高19cm、推定口径14cm、最大径は胴部上半で15.5cmとなる。

ＳＸ１６（第６・12図、図版６上）

ＭＣ79グリッドで確認した。長さ48cm、幅44cmの円形土坑（Ｐ０）の周囲に径20cm前後の柱穴状ピット（Ｐ１～12）が巡るように配されている。ただＰ12は明らかにＰ０を切っており、本遺構より新しいピットである。従って11本のピットのいずれかが円形ないしは弧状にＰ０の回りに存在していたと想定できる。柱穴間の距離での規模は、Ｐ１－Ｐ５、Ｐ３－Ｐ９が1.2ｍである。Ｐ０は、ほぼ垂直に掘り込まれており、深さは35cmである。坑内には細片化した土器が10数点と、比較的多量の焼土、炭化物が褐色土中に含まれる。この土はある時期に一気に埋められた様相を示している。周囲のピットは、黒褐色系の土が充填しており、その深さはＰ１・２・６・９・11で15cm前後、その他は25～34cmである。



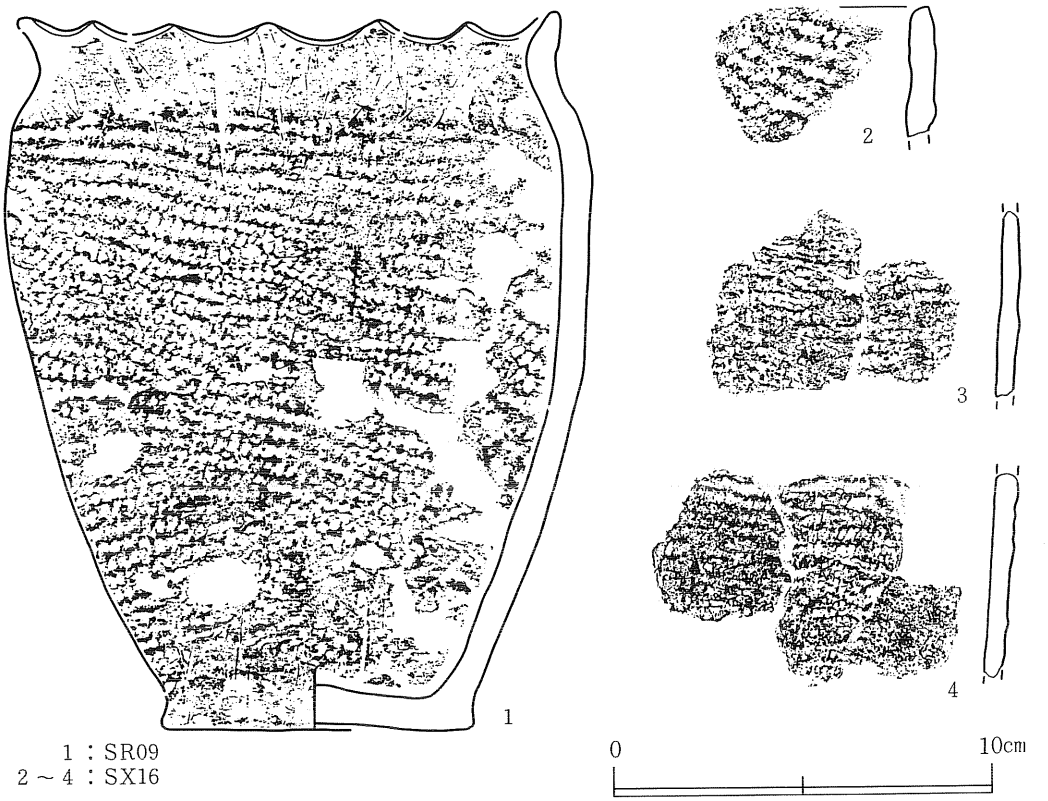
1．暗褐色土(10YR3/4)地山漸移層で人為的に埋めている



1．暗褐色土(7.5YR3/4)堅く締まる、炭化物多量に含む
2．褐色土(7.5YR4/4)堅く締まる、炭化物・焼土やや多く含む

1．褐色土(10YR4/4)地山粒子多く含む、人為的埋土

第６図　縄文時代の遺構



１：SR09
２～４：SX16

第７図　遺構内出土遺物(縄文)

第７図２～４は、Ｐ０出土の土器である。複数の個体があるが、いずれも形状を想定できるほどに復元はできなかった。地文はＬＲ縄文、０段多条ＬＲ縄文であり、外面には煤状炭化物が付着している。胎土は砂粒を多量に含み、ＳＲ09出土土器（１）と同質と思われる。

ＳＸ２０（第６・12図、図版６下）

ＭＣ・ＭＤ78グリッドで確認した。北約４ｍにはＳＸ16が位置している。長さ52cm、幅34cmの不整楕円形の中央の土坑(Ｐ０)の周囲に径あるいは１辺が20～38cmの円ないしは方形の柱穴状ピットが８本巡る。柱穴間の距離での規模は、Ｐ１－Ｐ５が1.2m、Ｐ４－Ｐ８で1.3ｍを測る。Ｐ０は深さ15cmで、人為的に埋められている。周囲のピットには、黒褐色～暗褐色系の土が入り込んでおり、その深さは、Ｐ４・７・８が25～36cm、他は15cm前後である。Ｐ０内から遺物の出土はなかったが、形態、規模、堆積土の状況からＳＸ16と同時期と考え、該期の遺構に含めた。

なお調査区北部では、中央の土坑は確認できないが、同質の堆積土を有する柱穴状ピットが円ないしは弧状に巡るような配置を示す例がある。第６図左上と第12図に点線で囲っているが、こららが１つのまとまりをもつ遺構であることの確証が得られないので、図示に留めている。

２　現代の遺構

該期に属する遺構は、調査区中央部53～58ラインの掘立柱建物跡２棟、溝状遺構１条、柱穴列１列、竪穴状遺構１基、土坑４基である。遺構確認面は、いずれも地山面である。この区域は、厚さ20cm前後の表土（Ⅰ層）の下が地山であり、表土を除去すると地山面が現れる。

ＳＢ３８掘立柱建物跡（第８図、図版７上）

ＭＤ・ＭＥ56・57グリッドで確認した。１間×１間を意図した方形の建物と思われるが、西面のみ２間となる。柱間距離は、Ｐ１－Ｐ２で2.25m、Ｐ２－Ｐ３で2.6m、Ｐ３－Ｐ５、Ｐ５－Ｐ１でそれぞれ2.5mとなる。各柱穴は径25～30cm、深さは平均で21cmである。

ＳＢ４１掘立柱建物跡（第８図）

ＭＣ57・58、ＭＤ57グリッドで確認した。ＳＢ38と隣接し、全容は明らかではないが、柱穴規模からこれとほぼ同規模であったと思われる。現況での柱間距離は、Ｐ６－Ｐ８で2.2m、Ｐ８－Ｐ９で2.6m、Ｐ９－Ｐ10で1.35mとなる。柱穴は径20～25cm、平均の深さは14cmである。

ＳＤ３３溝状遺構（第８図、図版７上）

ＭＤ・ＭＥ57・58で確認した。幅20～25cmでＳＢ38の東から北にかけて弧状に巡り、一旦途切れるがＰ５の西で再び検出できる。深さは４～８cm足らずである。

ＳＡ４２柱列（第８図）

ＭＤ56・57グリッドで確認した。ＳＤ33の西側でこれに沿うように南北方向に延びる。Ｐ11～Ｐ13で構成される。柱間距離は3.3m、各柱穴は径30cm前後、平均の深さは22cmとなる。

ＳＤ33とＳＡ42は、その配置からＳＢ38に伴う施設であった可能性が高く、排水の溝あるいは塀・柵が巡っていたと想定できる。

ＳＫ０６土坑（第９図、図版７中）

ＭＦ55グリッド杭直下で確認した。長さ85cm、幅65cmの楕円形を呈する。摺鉢状の掘り込みで、その深さは35cmである。堆積土中より正立して瓦質の消壺（第10図５）が、周辺から細片化した七輪（６）が出土している。

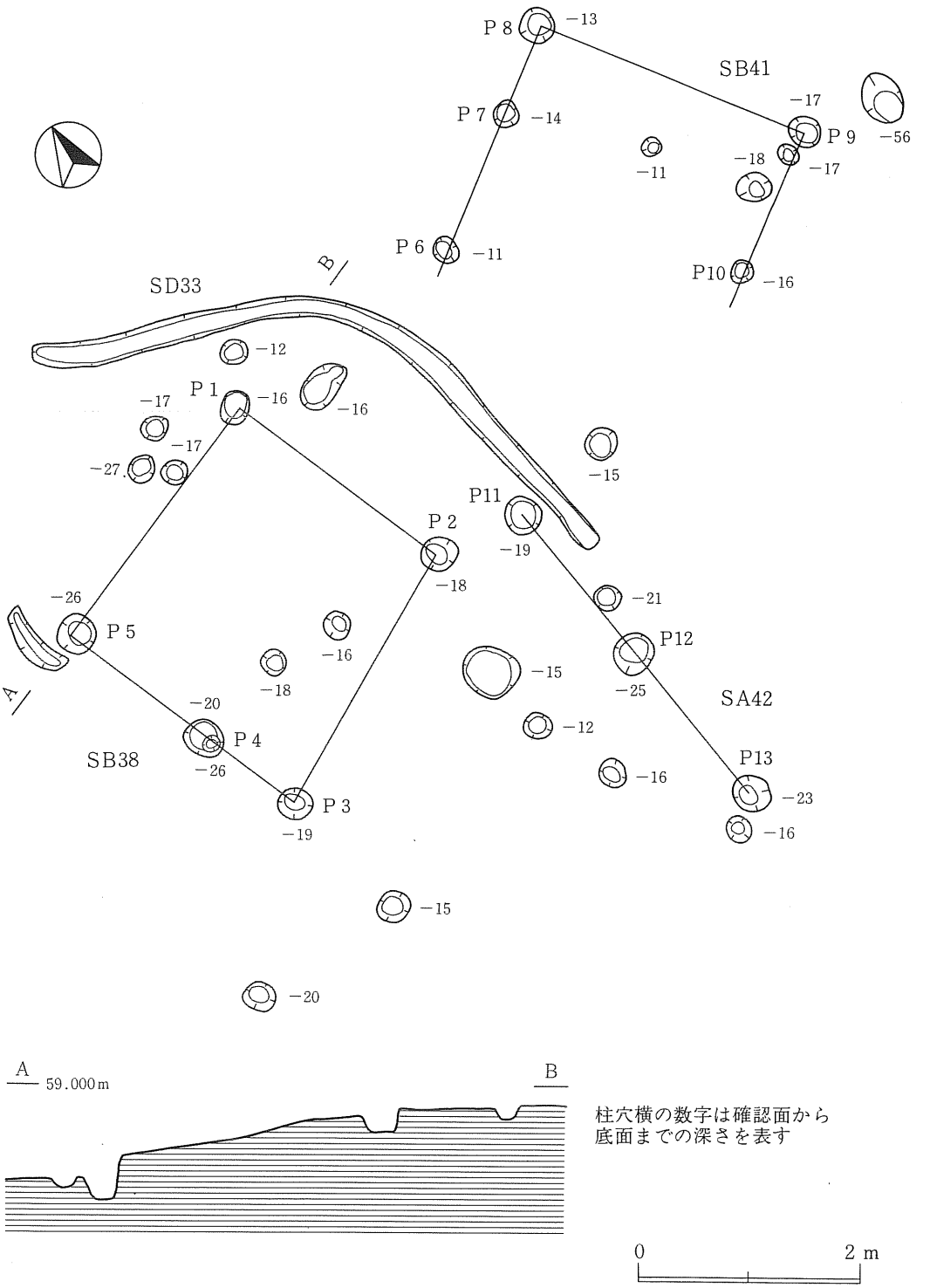
５は、いわゆる消壺で本来は蓋が付くものであるが、確認できなかった。器高17.4cm、最大径21.8cm、底部には突起状の３脚がつく。色調は外面黒褐色、内面暗褐色である。

６は、七輪の下半部と思われる。図示面正面には方形の窓があく。色調は５と同じである。

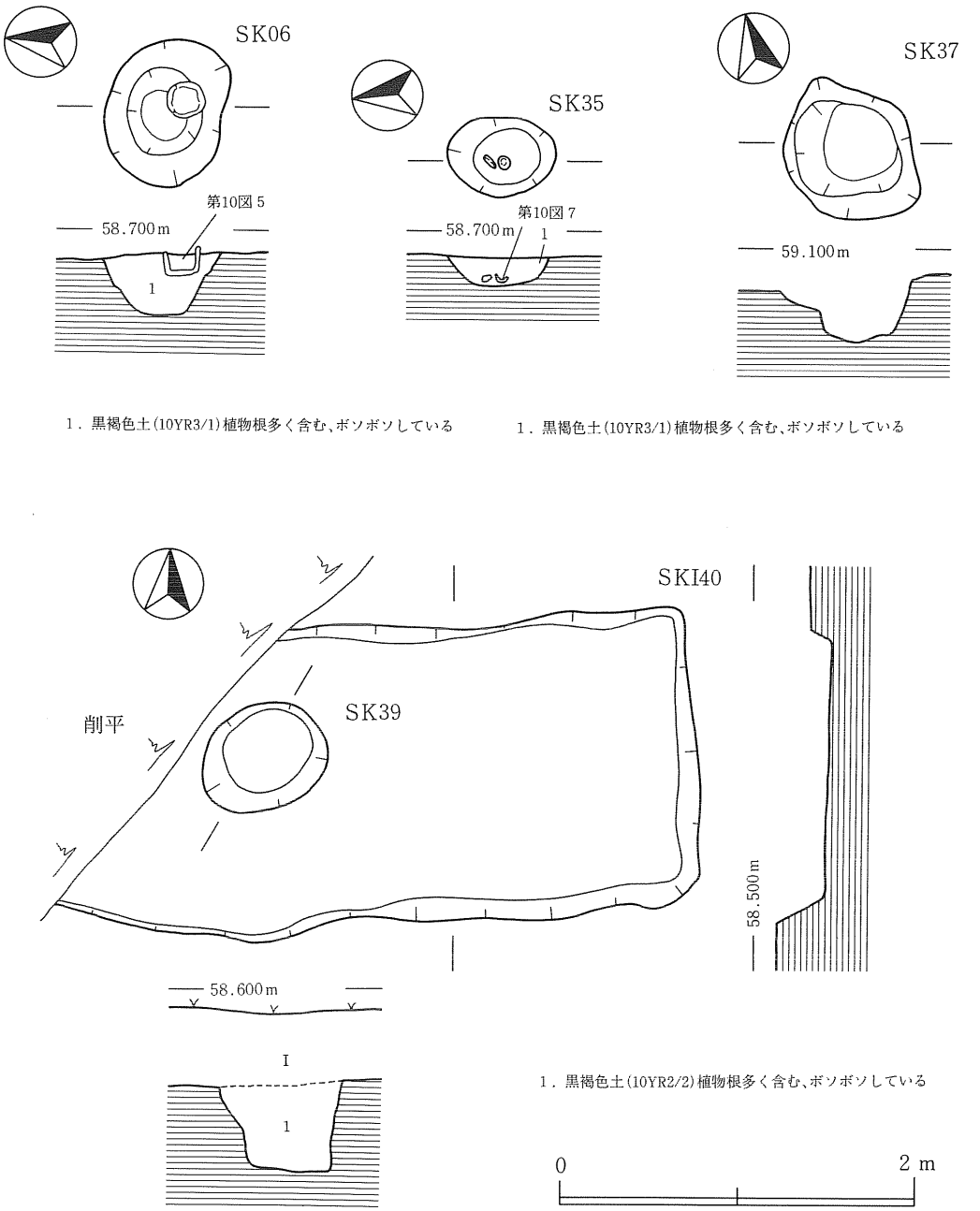
ＳＫ３５土坑（第９図、図版７下）

ＭＦ53グリッドで確認した。長さ62cm、幅46cmの楕円形を呈する。深さは18cmである。底面直上から陶質の小坏（第10図７）と拳大の自然礫が隣接して出土した。

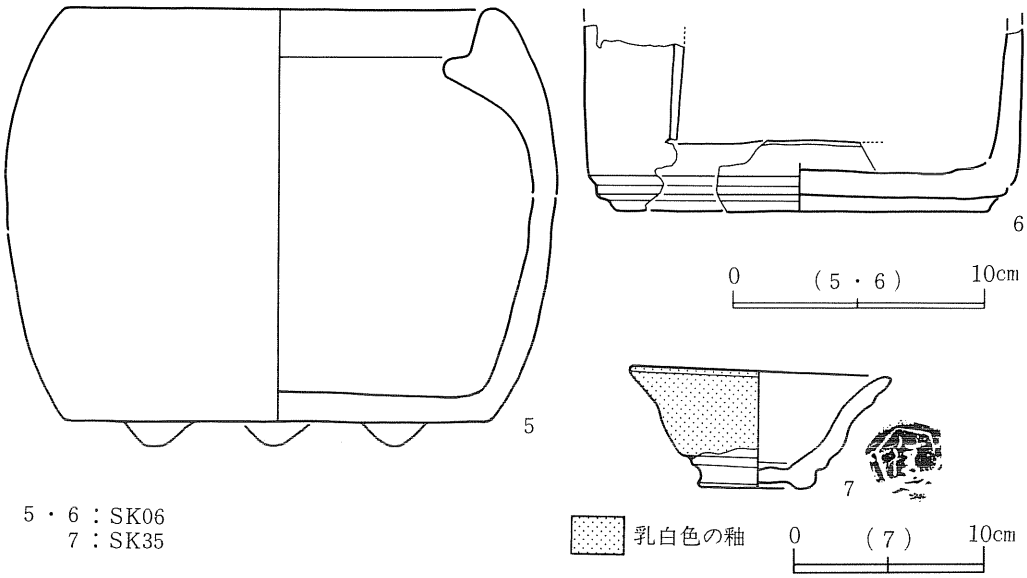
７は、口径6.7cm、高さ3.2cmの小坏である。褐色系の素地の上に淡緑灰色の釉をかけ、更


P 8
−13
SB41
P 7
−14
−17
P 9
−56
−11
−18
−17
P 6
−11
P10
−16
B
SD33
−12
P 1
−16
−16
−17
−17
−27
−15
P11
P 2
−19
−18
−21
−26
P 5
P12
−16
−15
−18
−25
A
SA42
−20
−12
P 4
SB38
−26
P13
−16
P 3
−23
−19
−16
−15
−20
A
59.000m
B
柱穴横の数字は確認面から
底面までの深さを表す
0
2 m

第８図　現代の遺構(1)


SK06
第10図５
58.700m
1
SK35
第10図７
58.700m
1
SK37
59.100m
1．黒褐色土(10YR3/1)植物根多く含む、ボソボソしている
1．黒褐色土(10YR3/1)植物根多く含む、ボソボソしている
SKI40
削平
SK39
58.500m
58.600m
I
1
1．黒褐色土(10YR2/2)植物根多く含む、ボソボソしている
0
2 m

第９図　現代の遺構(2)



第10図　遺構内出土遺物(現代)

に台部を除く内外面に乳白色の釉を刷毛塗りしている。鑑定をお願いした大橋氏によると、この小坏は京焼で、18世紀後半～19世紀の所産とのことである。

ＳＫ３７土坑（第９図）

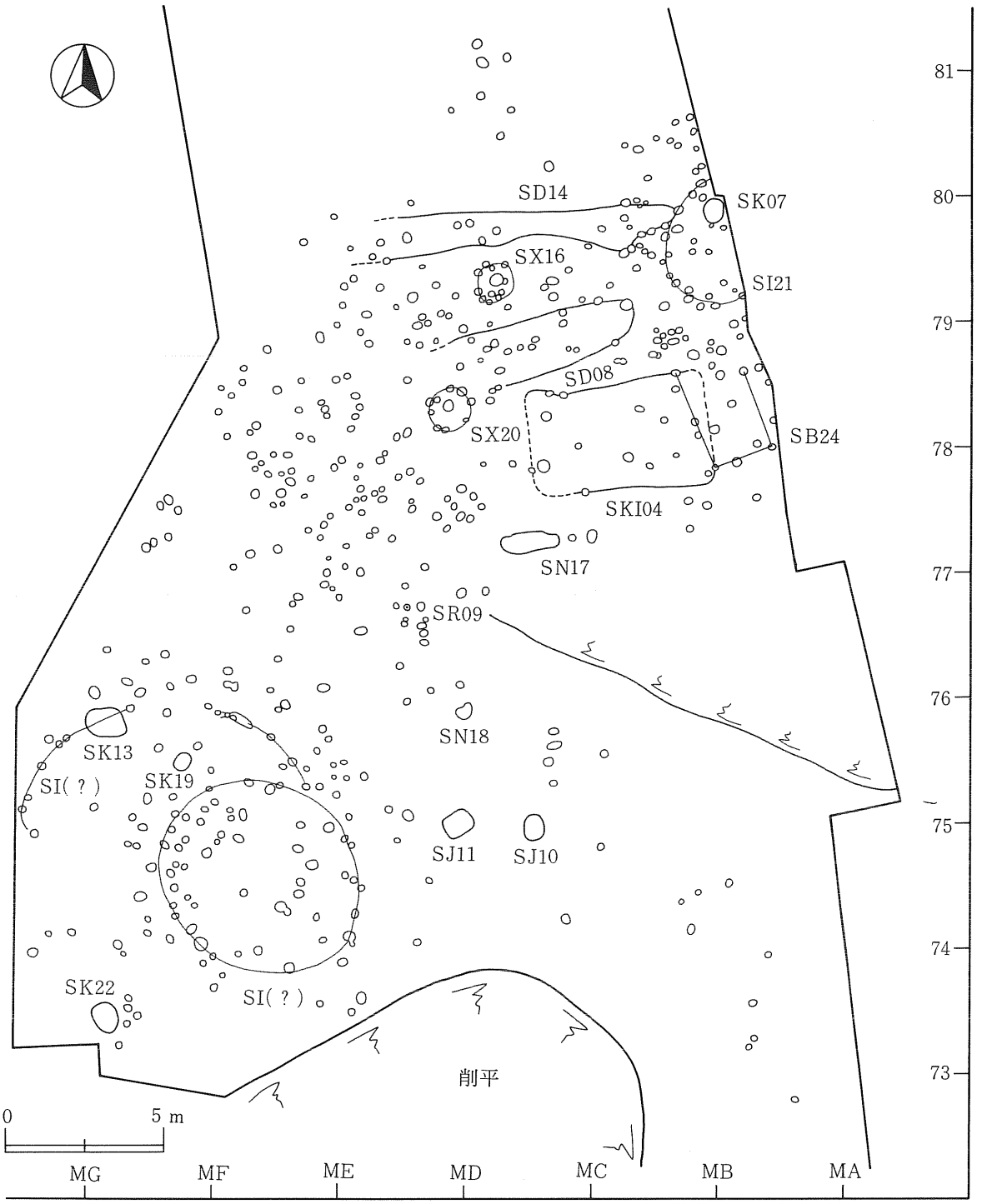
ＭＤ54グリッドで確認した。径あるいは１辺が75cm前後の不整円形ないしは方形を呈する。深さは38cmとなる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ３９土坑（第９図）

ＭＦ56グリッドで確認した。ＳＫ40と重複する。堆積土の状態から本土坑が先に埋められ、あまり時を置かずにＳＫ40が埋められているようである。規模は、長さ75cm、幅60cmの略円形を呈する。深さは52cmである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ４０竪穴状遺構（第９図）

ＭＦ56グリッドで確認した。ＳＫ39と重複する。遺構西側は畑地造成の際の削平により失われている。確認できる長さは365cm、幅170cm前後の長方形を呈すると見られる。深さは、最深で28cm、底面は平坦で、比較的よく締まっている。遺物は出土しなかった。



第11図　調査区北部遺構配置図

３　時期不明の遺構

時期不明の遺構は、73ライン以北の調査区北部、59～65ラインの中央部、52ライン以南の南部に位置している。

（１）調査区北部の遺構（第11図）

本区での時期不明遺構は、住居跡１軒、竪穴状遺構１基、掘立柱建物跡１棟、溝状遺構２条、土坑６基、焼土遺構２基、及び数多くの柱穴状ピットがある。これら遺構の確認面は、西側に位置するＳＫ13・19・22が地山面である以外は、地山漸移層面（Ⅲ層）である。いずれも遺物の出土はない。

①住居跡

ＳＩ２１住居跡（第12図）

ＭＡ・ＭＢ79、ＭＢ80グリッドで確認した。径25cm前後の柱穴がおよそ20～40cmの間隔で半円状に12本巡ることから焼土、炉などの検出はできなかったものの、住居跡と判断した。遺構東半は調査区外となる。柱穴間で推定される直径は3.8mとなるようである。柱穴の深さは20～35cm、平均で24cmである。推定径内には土坑ＳＫ07が位置するが、新旧あるいは同時存在の可否は明らかではない。

この他、ＭＥライン以西においても多くの柱穴状ピットが確認できており、一部では円あるいは弧状を描くように配置されている。しかしＳＩ21ほど規則性はなく、焼土、炉などの施設も検出できなかったことから、第11図に推定線をいれた図を示すに留めたい。

②竪穴状遺構

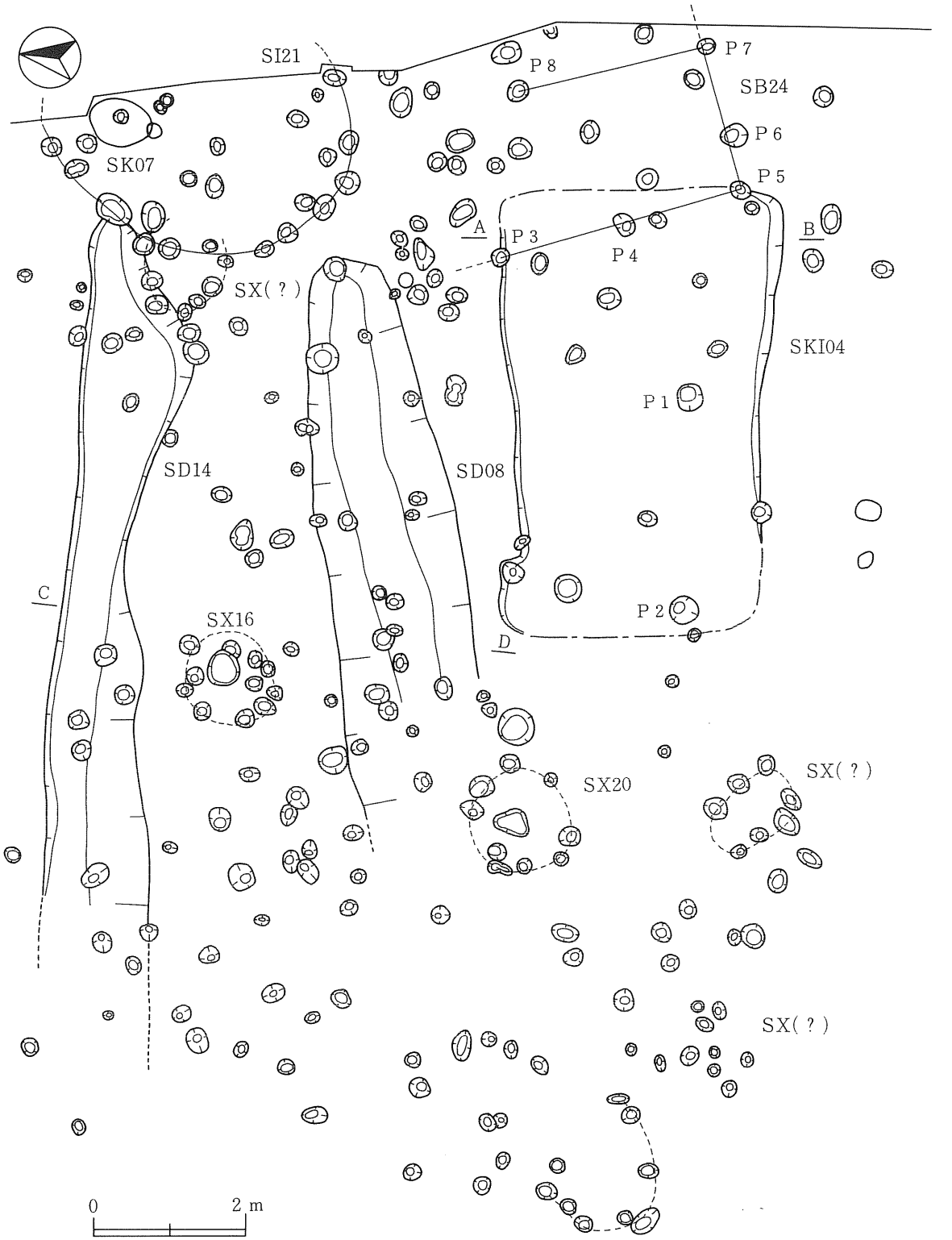
ＳＫＩ０４竪穴状遺構（第12図、図版８上・９上）

ＭＢ・ＭＣ77・78グリッド、北向きの緩斜面で確認した。東側の壁はＳＢ24を構成する柱穴により切られる。東・西壁の大部分は検出できなかったが、推定の長さ5.9m、幅3.4～3.7mの東西に長い長方形を呈する。壁高は、北側で５～10cm、南側で最大40cmである。床面は比較的平坦で良く締まっている。柱穴は10数基確認しているが、規則的配置は読み取れなかった。しかし、Ｐ１・２は径35～40cm、深さ32cm（Ｐ１）、54cm（Ｐ２）のしっかりした掘り込みであり、主柱をなしていた可能性がある。

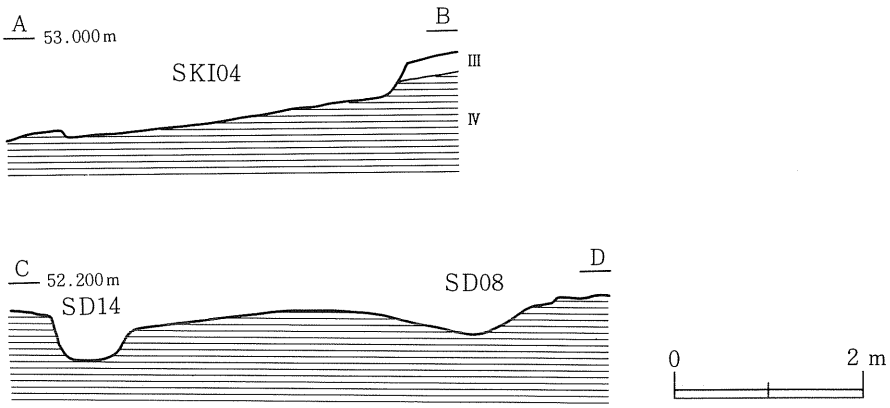
③掘立柱建物跡

ＳＢ２４掘立柱建物跡（第12図）

ＭＡ・ＭＢ77・78グリッドで確認した。ＳＫＩ04の壁と重複し、これを切る。図に示したＰ３～Ｐ８が掘立柱建物跡の一部を構成すると思われる。これは周囲の柱穴の堆積土が黒褐色系であるのに対し、６本の柱穴は暗褐色系で、土の締まりも他より弱いという共通点がある。しかもこれらが直線上に柱穴が並ぶことから、建物跡と判断した。おそらく北側もしくは東側の



第12図　調査区北部遺構配置図



第13図　調査区北部遺構エレベーション図

調査区外に延びる建物となるであろう。

各柱穴は径25～30cm、深さは17～31cm、平均22cmである。柱間の距離は、現況でＰ３－Ｐ５が3.25m、Ｐ５－Ｐ７が２m、Ｐ７－Ｐ８が2.5mである。

④溝状遺構

ＳＤ０８溝状遺構（第12図、図版８上）

ＭＢ・ＭＣ78・79、ＭＤ78グリッドで確認した。東西方向に延びる溝で、検出した長さは7.4m、最大幅1.8mとなる。深さは20～40cm、底面レベルは、東端を０とすると西端で—57cmとなり、西に向かって緩やかに傾斜している。

ＳＤ１４溝状遺構（第12図、図版８上）

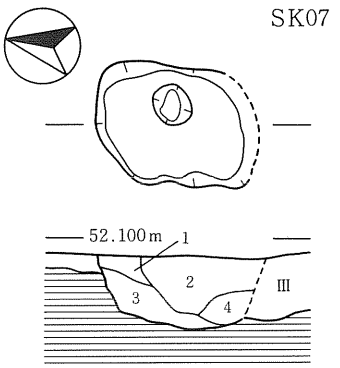
ＭＢ～ＭＥ79グリッドで確認した。南約２mにＳＤ08が位置している。東西方向に延びる溝で、検出した長さは9.4m、最大幅1.4mとなる。溝北側はほぼ垂直に掘り込まれ、最深で55cmとなる。底面レベルは、東端を０とすると西端で—66cmとなり、西に向かって緩やかに傾斜している。

ＳＤ08・14は、形態、立地から雨水等をより西側の低所に導くための排水路、もしくは下方から登ってくるための道路の一部であった可能性がある。

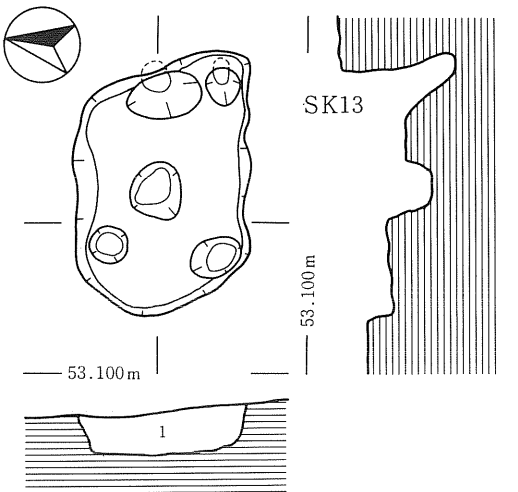
⑤土坑（１）

ＳＫ０７土坑（第14図）

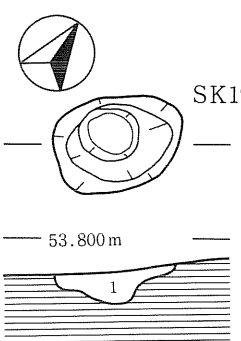
ＭＡ・ＭＢ79グリッドで確認した。ＳＩ21と重複しているが、新旧あるいは同時存在かは不明である。土坑南側は撹乱により一部失われているが、推定の長さ90cm、幅65cmの不整楕円形を呈すると思われる。深さ40cm、底面は小さな凹凸があり、径20cm、深さ31cmのピットが掘り込まれている。



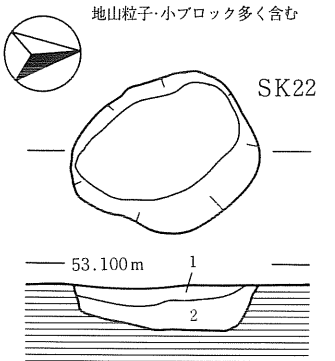
1．　褐色土(7.5YR3/4)締まりややあり
2．　褐色土(7.5YR4/4)
3．　にぶい褐色土(7.5YR5/4)堅く締まる
4．　明褐色土(7.5YR5/6)堅く締まる



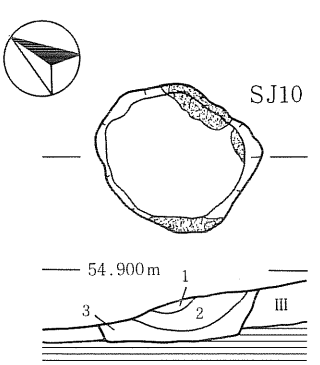
1．　褐色土(7.5YR4/4)締まりややあり、
地山粒子･小ブロック多く含む



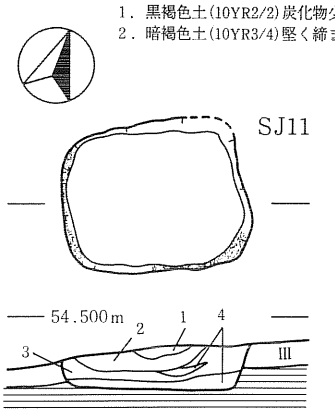
1．　褐色土(10YR4/6)堅く締まる、炭化物少量含む



1．黒褐色土(10YR2/2)炭化物少量含む
2．暗褐色土(10YR3/4)堅く締まる

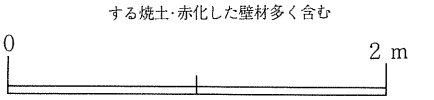


1．黒褐色土(10YR2/2)
2．暗褐色土(10YR3/4) 締まり弱、焼土多量、10mm大の炭化材少量含む
3．黒色土(10YR2/1) 締まりは2層よりややあり、炭化物を主とする焼土･赤化した壁材多く含む

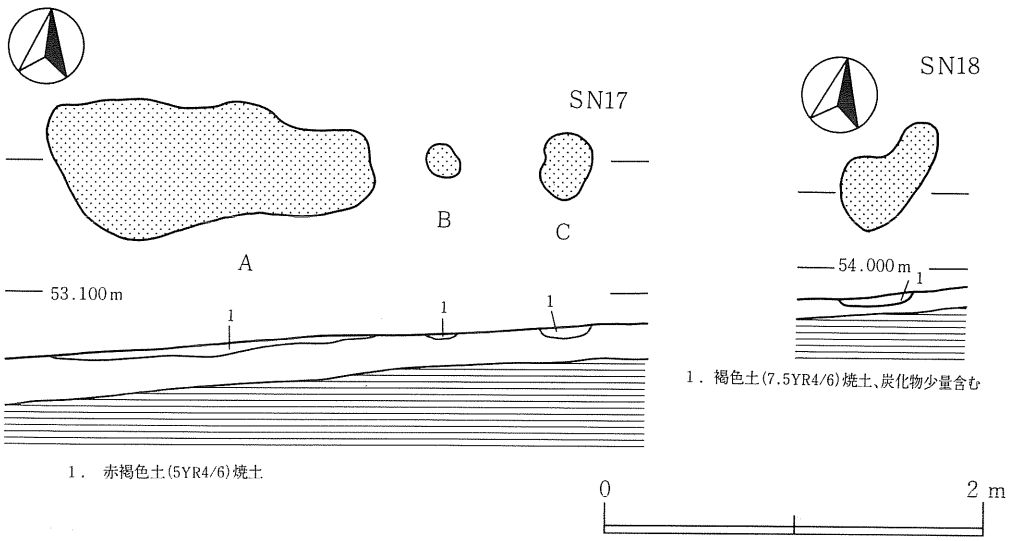


赤化範囲

1．　黒褐色土(10YR2/2)
2．　暗褐色土(10YR3/4)締まり弱、焼土を多量に炭化材を少量含む
3．　暗褐色土(10YR3/3)炭化物微量含む
4．　黒色土(10YR2/1) 締まりは3層よりややあり、炭化物を主とする焼土･赤化した壁材多く含む



第14図　時期不明の遺構(1)　調査区北部



第15図　時期不明の遺構(2)　調査区北部

ＳＫ１３土坑（第14図）

ＭＦ・ＭＧ75グリッドで確認した。長さ140cm、幅92cmの不整長方形を呈している。深さは24cm、底面は平坦ではなく凹凸している。更に径20～40cmのピットが５本掘り込まれているが、本土坑に伴うのか否かは不明である。

ＳＫ１９土坑（第14図）

ＭＦ75グリッドで確認した。ＳＩ12と重複しているが、新旧あるいは同時存在かは不明である。長さ70cm、幅50cmの楕円形を呈する。深さは22cmである。

ＳＫ２２土坑（第14図）

ＭＦ73グリッドで確認した。長さ98cm、幅82cmの不整楕円形を呈する。深さは24cmである。

⑥土坑（２）

ＳＪ１０土坑（第14図、図版９）

ＭＣ74・75グリッド、北向きの緩斜面で確認した。西約２ｍにはＳＪ11が位置している。長さ82cm、幅72cmの隅丸方形を意図して構築したと思われる。深さは北側で10cm前後、南側で25cm、底面は平坦でほぼ水平である。底面と壁面の一部は焼け、赤化している。堆積土には多量の炭化物・材が含まれている。

ＳＪ１１土坑（第14図、図版10）

ＭＤ75グリッド杭直下で確認した。長さ100cm、幅80cmの整った隅丸長方形を呈している。深さは24cmあり、ＳＪ10同様底面、壁面の一部が焼け、赤化している。堆積土の状況もＳＪ10と同じである。

ＳＪ10・11は、何らかの焼成遺構と思われる。堆積土中に多量の炭化物・材が含まれている

ことから、炭窯であった可能性が高い。なおこれらの炭化材は、同定の結果、クリ、マツ属、イネ科タケ亜科等であることが明らかとなった（第５章第２節参照）。

⑥焼土遺構

ＳＮ１７焼土遺構（第15図）

ＭＢ・ＭＣ77グリッドで確認した。焼土の広がりが３箇所（Ａ、Ｂ、Ｃ）見られるが、本来は東西方向に長い１つの遺構であった可能性がある。図示したＡで長さ175cm、幅75cm、Ｂで長さ、幅18cm、Ｃで長さ35cm、幅28cmを測る。焼土は３～６cmの厚さで堆積している。

ＳＮ１８焼土遺構（第15図）

ＭＣ・ＭＤ75グリッドで確認した。長さ65cm、幅38cmの不整楕円形を呈する。焼土の厚さは６cm程である。

ＳＮ17・18は共に掘り込みなく、底面も焼けていないことから、検出位置での火の使用はなく、他所での使用の後、焼土がここに運ばれ遺棄されたと理解できる。

（２）調査区中央部の遺構

本区では土坑２基、柱穴列１列、溝状遺構１条を確認している。この区域は、畑地造成に伴う整地により削平されており、遺構は削平された地山面での確認である。

ＳＪ０２土坑（第16図、図版11）

ＬＳ・ＬＴ59で確認した。長さ105cm、幅100cmの円形を呈する。深さは12cm、壁面、底面ともに焼け、赤化固結している。堆積土中には焼土・炭化物を多く含んでいる。

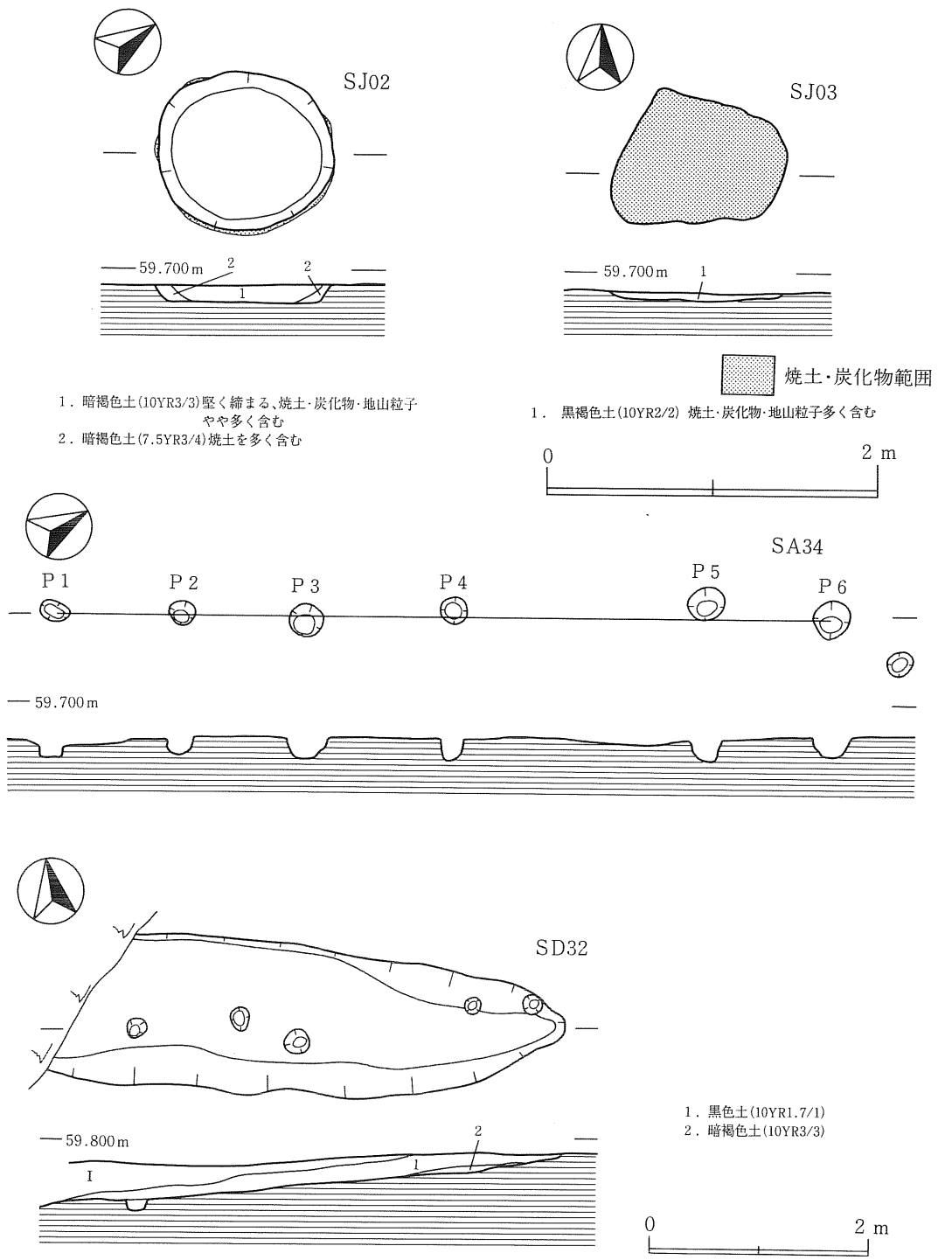
ＳＪ０３土坑（第16図、図版11）

ＬＴ・ＭＡ60で確認した。南東約５ｍにはＳＪ02が位置している。長さ100cm、幅82cmの不整形を示しているが、現代の整地に伴う削平で変形を受けており、現況規模と堆積土から判断して、本来はＳＪ02と同規模、同形態であったと思われる。壁の立ち上がりも判然としないが底面は赤化が認められる。

ＳＪ02・03は、壁面、底面が赤化固結していることから何らかの焼成遺構と判断できる。調査区北部で検出したＳＪ10・11も焼成遺構であるが、形態、酸化の度合いから両者は異質の遺構と思われる。すなわち、ＳＪ10・11は炭窯、ＳＪ02・03は前者より窯内温度が高く、土器（土師器か）焼成の窯であった可能性もある。

ＳＡ３４柱穴列（第16図）

ＭＢ59・60、ＭＣ59グリッドで確認した。柱穴６本で構成される柱穴列である。軸線は北東－南西方向をとり、Ｐ１からＰ６までの距離は７ｍである。各柱穴は、径25～30cm、深さは15～20cmとなる。



第16図　時期不明の遺構(3)　調査区中央部

本遺構は位置的に見て、東側にあるＳＪ02・03土坑の風防施設であった可能性が考えられる。

ＳＤ３２溝状遺構（第16図）

ＬＲ・ＬＳ64・65グリッドで確認した。遺構西端は、畑地造成の際に削平され明らかにできなかった。検出した長さは4.6m、最大幅1.4mである。深さは東側で５～20cm、西限で35cmとなり、西側に向かって緩やかに傾斜している。溝底面は小さな凹凸があり、柱穴状のピット（径15～20cm、深さ10～23cm）が５本が掘り込まれている。周辺に同様のピットが見られないことから、本遺構に伴うものと思われる。

（３）調査区南部の遺構

本区では土坑３基を検出している。遺構確認面は、いずれも地山漸移層（Ⅲ層）である。

ＳＫ０１土坑（第17図、図版12）

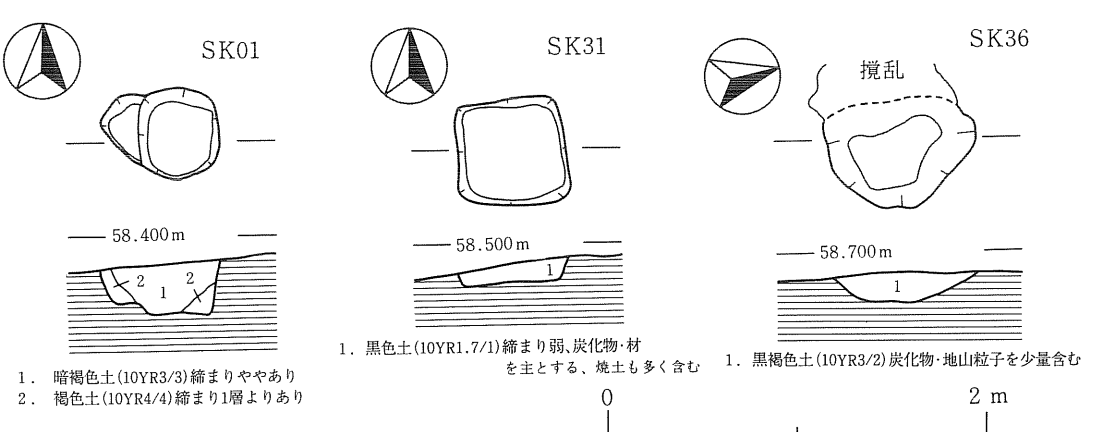
ＭＧ49グリッドで確認した。長さ64cm、幅50cmの不整方形を呈する。底面は２段となり、西側での深さ20cm、東側では28mとなる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ３１土坑（第17図、図版12）

ＭＧ51グリッドで確認した。１辺58cmの整った隅丸方形を呈する。深さは12cmで、坑内には炭化物・材が充填している。壁面は全体の3／4が焼け、赤化している。底面は平坦であるが、壁面のような赤化は見られない。遺物は出土しなかった。なお坑内の炭化材は、同定の結果、カツラ近似種、イネ科タケ亜科等であることが明らかとなった（第５章第２節参照）。

ＳＫ３６土坑（第17図）

ＭＦ53グリッドで確認した。遺構西側は根による撹乱を受け、規模、形態は明確ではないが、長さ80cm、推定幅60cmの不整楕円形を呈すると思われる。深さは17cm、遺物は出土しなかった。



第17図　時期不明の遺構(4)　調査区南部

第２節　遺構外出土遺物

遺構外出土の遺物は、縄文土器、石器、土師器、須恵器、陶器など多岐にわたるが、その数は少なく、点数にして270点程である。出土比率で見ると、縄文土器が圧倒的に多く、全体の84.6％、石器は7.3％、土師器、陶器はそれぞれ3.7％、須恵器は0.7％となる。

遺物の分布はおよそ、49ライン以南の調査区南端部、54～58ラインの中央部、74ライン以北の北部にまとまる。各まとまりは、調査区南端部は縄文土器、石器のみ、中央部は縄文土器、石器、須恵器、陶器、北部は縄文土器、石器、土師器といった具合である（第18・19図参照）。これら遺物の出土層位は、削平・盛土により不明確な箇所を除くと、ほぼⅢ層中に収まる。

１　縄文土器（第20～22図、図版14・15）

出土した縄文土器は、胎土、器面調整、地文などから２大別できる。

第Ⅰ群土器：縄文時代中期に比定できる土器（８、９）

８、９は、同一個体と思われる土器で、ＲＬ縄文を横位回転施文する深鉢形土器の胴部破片である。胎土には砂粒が少なく、精選された粘土を使用している。色調は明褐～赤褐色を呈している。本群は、調査区北部でのみ出土している。

第Ⅱ群土器：縄文時代後期後葉～晩期に比定できる土器（10～29）

本遺跡で主体を占める土器である。器面調整、地文、胎土、文様などから類別、種別する。

１類（10～14）：基本的に器面を全面研磨している類である。

ａ種（10）：いわゆる瘤付土器である。器種は明らかではないが、器厚が薄く小型の製品と思われる。瘤以外は無文で、外面全体は丁寧に研磨されている。色調は、外面黒褐色、内面明褐色である。本種は、調査区中央部から１点のみの出土である。

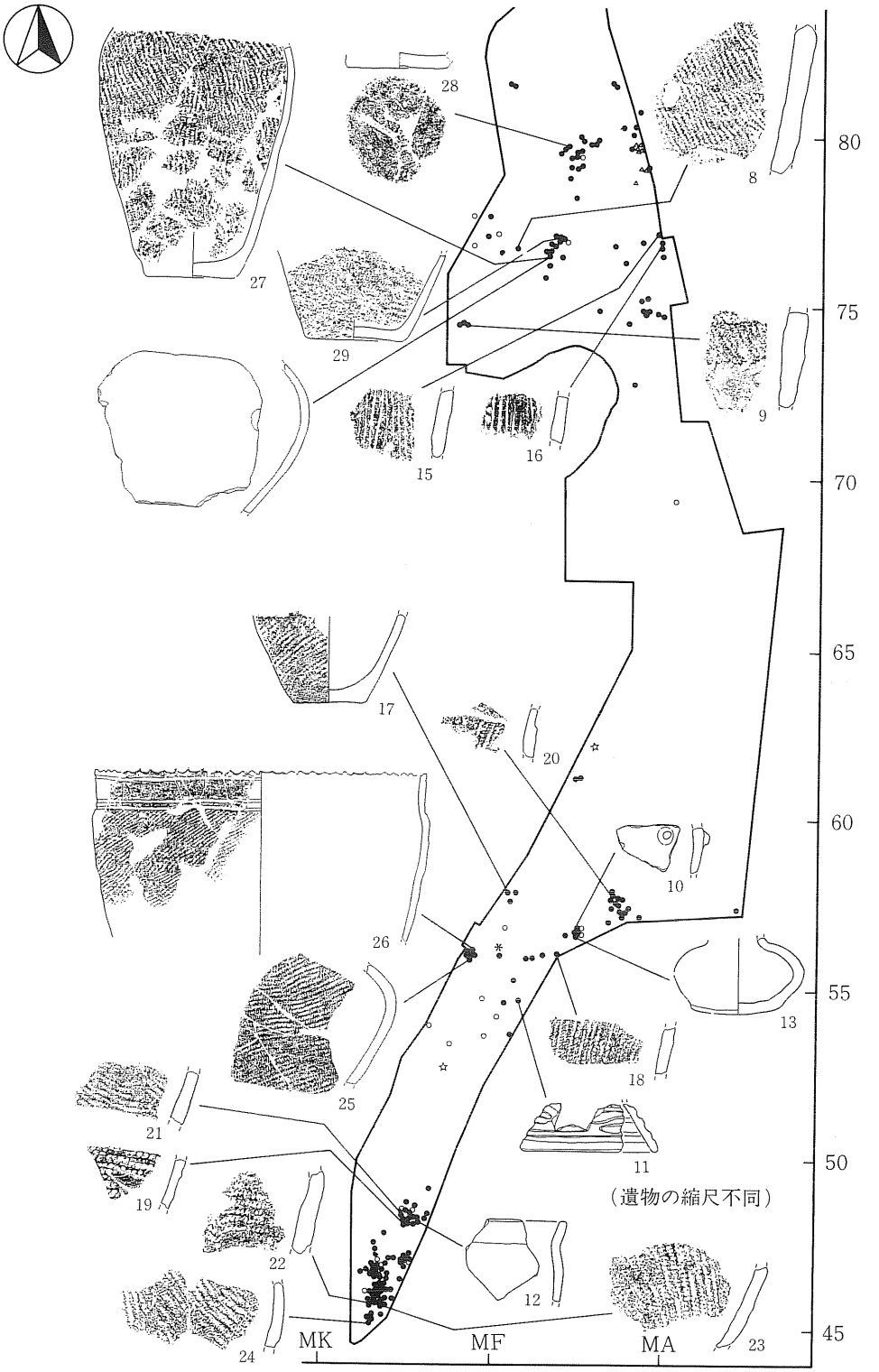
ｂ種（11）：沈線の見られる土器である。11は、高坏の脚部で、幅広の平行沈線が４条施文されている。色調は暗赤褐色を呈する。本種は、中央部から１点のみの出土である。

ｃ種（12～14）：ａ・ｂ種のような文様の認められない土器をまとめた。12は鉢形、13は小型の壺、14は大型の壺であろう。13の底部には小さい貼瘤状の脚が４つ付く。12、14は一見土師器を思わせる器形ではあるが、本遺跡出土の土師器とは胎土が異なる。色調は、12が明褐色、13、14が赤褐色を呈する。本種は、各区域で出土している。

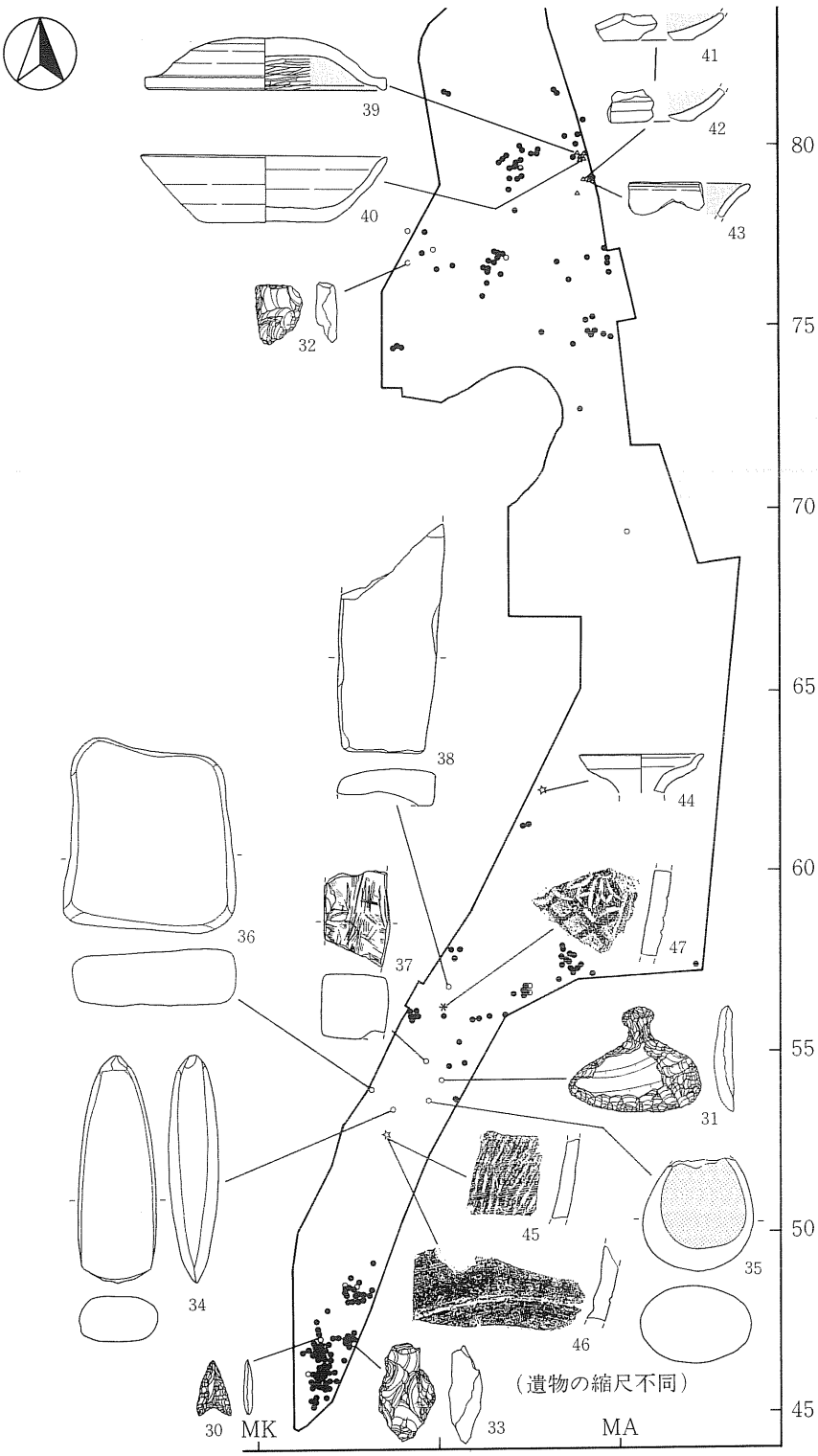
２類（15～29）：基本的に縄文もしくは条痕で文様が構成されている類である。

ａ種（15、16）：縦方向の条痕の見られる土器である。２点とも摩滅著しい。色調は、15は明褐色、16は暗褐色を呈する。調査区北部から出土している。

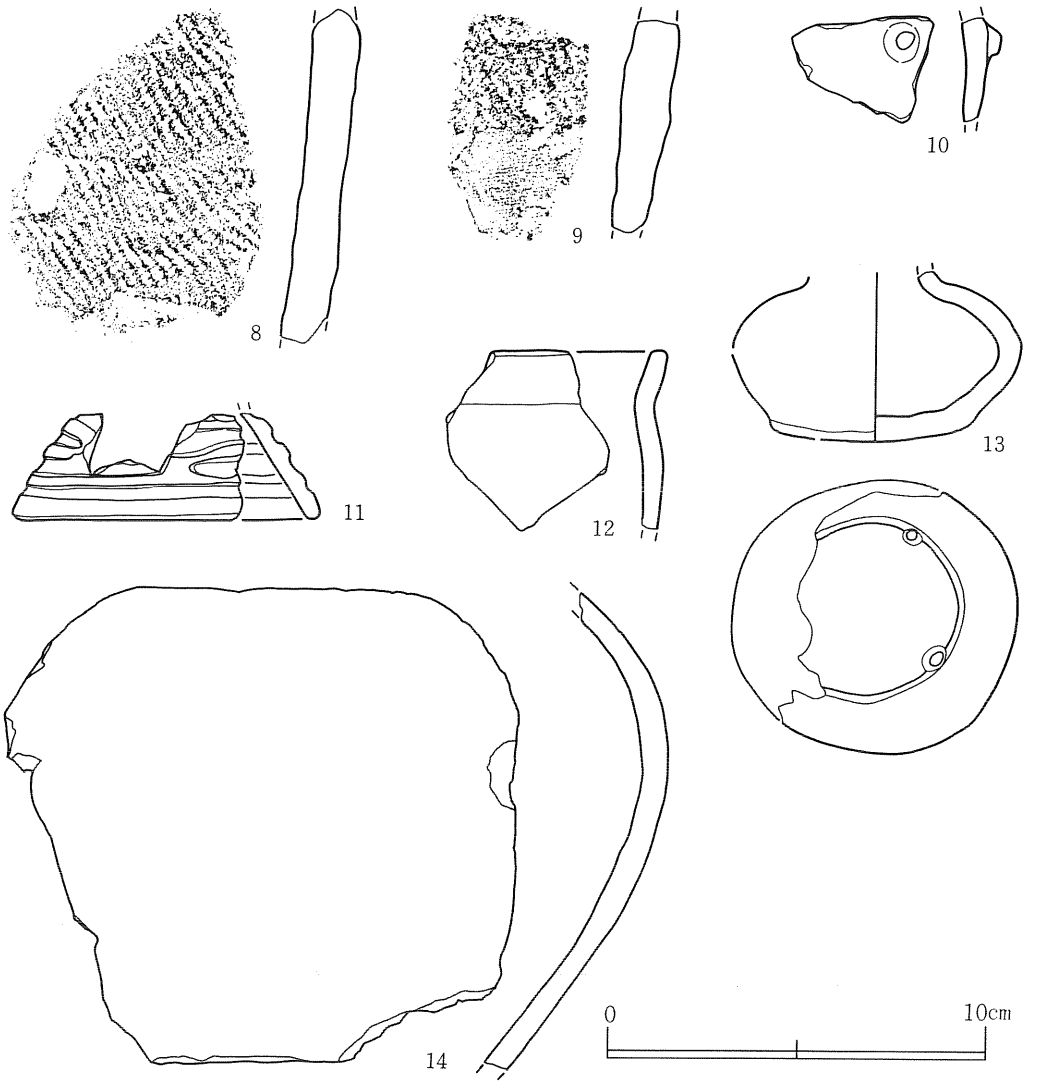
ｂ種（17～21、25）：縄文のみの施文で、胎土が比較的精選されているものをまとめた。17～21は鉢形、深鉢形、25は、壺形である。色調は明褐色を示している。本種は、各区域で出土



第18図　遺物出土位置図(1)　縄文土器



第19図　遺物出土位置図(2)

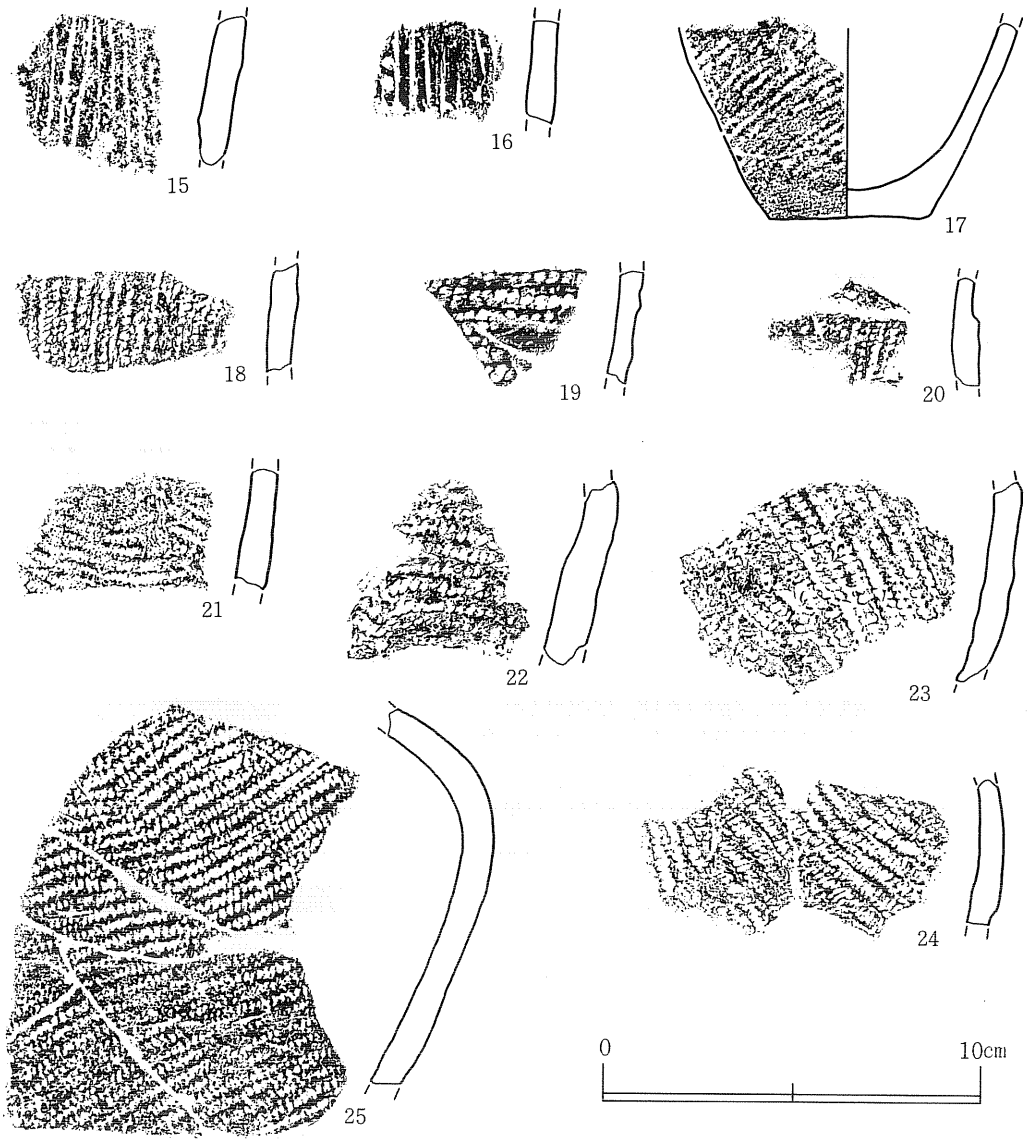


第20図　遺構外出土遺物(1)　縄文土器(1)

している。

ｃ種（22～24、26～29）: 胎土に粒径の大きい砂粒を多く含んでいるものをまとめた。27、29などは、縄文のみであるが、ｂ種とは明らかに胎土が異なり、簡単に両者の識別ができる。本種土器の色調はいずれも暗褐色～黒褐色で、大部分の個体外面には煤状炭化物の付着が認められる。

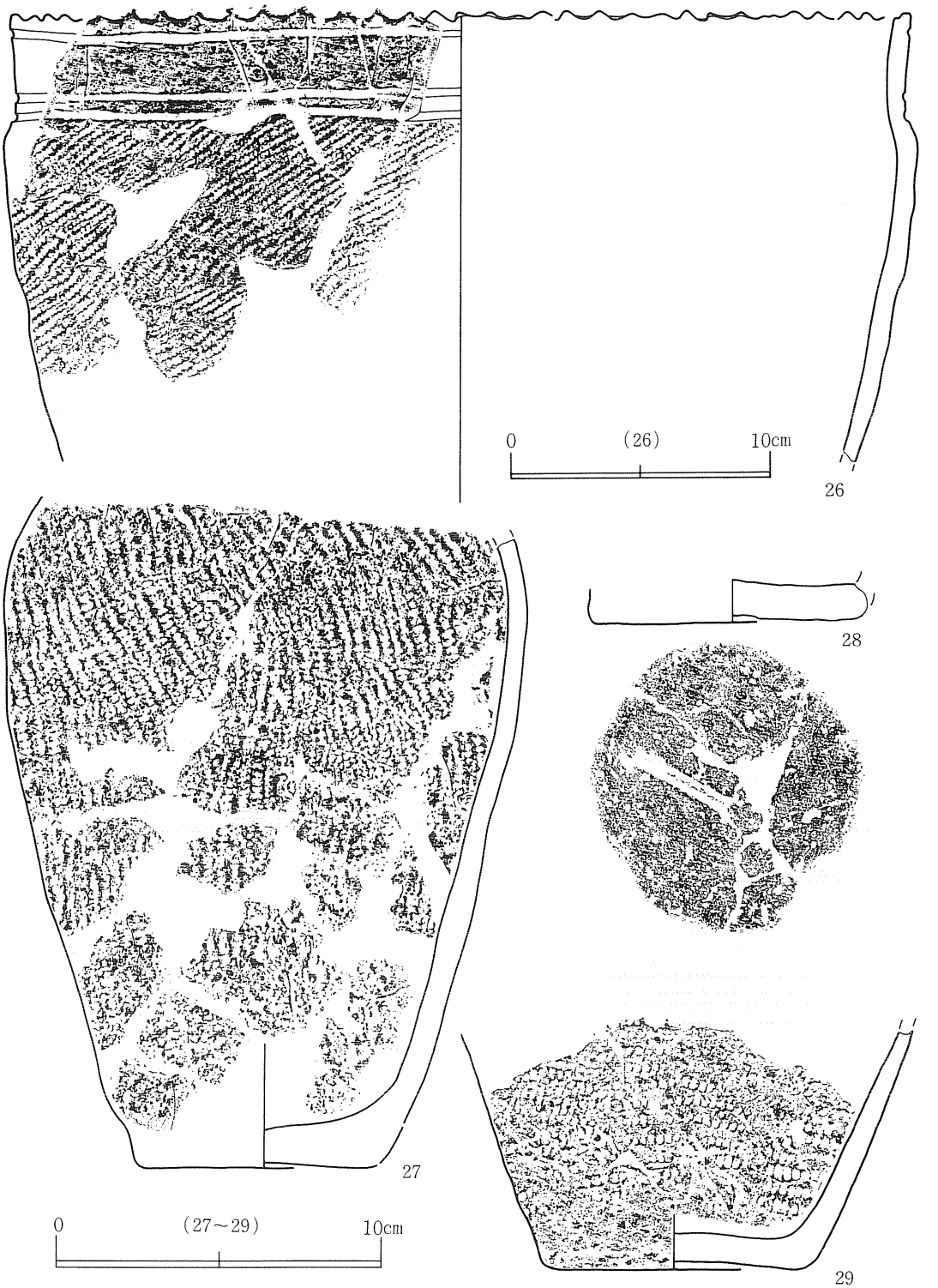
26は推定口径34.4cmの大型の深鉢形土器である。口唇部には指頭押圧による小波状口縁を作り、口縁上部に１条、屈曲する頸部に２条の沈線が引かれている。頸部から上は沈線を引く前段階に磨消されている。27は、ＳＲ09出土土器（第７図１）の北東１ｍの至近距離で出土した鉢形土器である。ＳＲ09同様、倒立状態で出土したが掘り込みが見られず、意図的に納めたの



第21図　遺構外出土遺物(2)　縄文土器(2)

か否かの確認ができなかった。このため遺構外として扱っているが、胎土の共通性からも両者の密接な関係がうかがえる。

本種土器は、各区域でまんべんなく出土しており、量も多い。ＳＲ09、ＳＸ16出土土器（第７図２～４）も本種にあたる。

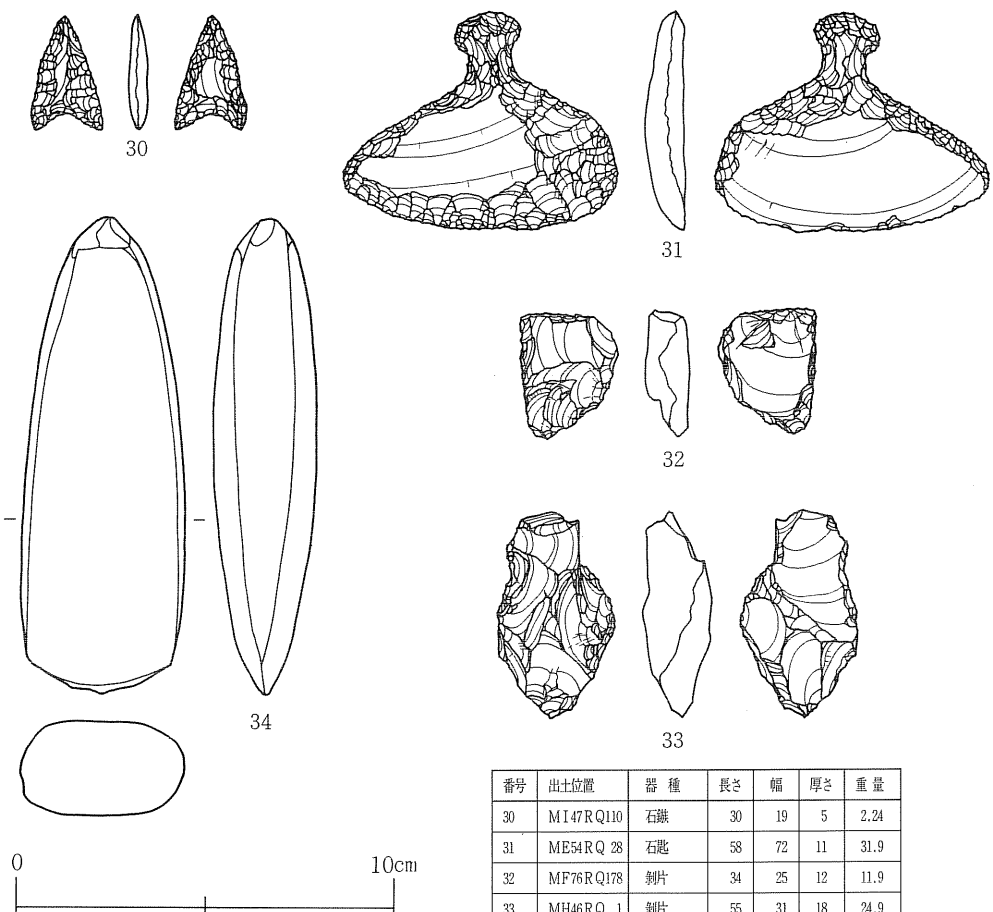


第22図　遺構外出土遺物(3)　縄文土器(3)

２　石器（第23、24図、図版16）

出土した石器は、石鏃１点、石匙１点、剥片13点、磨製石斧１点、磨石１点、石皿１点、砥石２点である。砥石は、形態的に見て平安時代かそれ以降と思われるが、その他は縄文時代に属する遺物であろう。石質は、30～33が頁岩、34が砂質凝灰岩、35、36が安山岩、37が緑色凝灰岩、38が砂岩である。

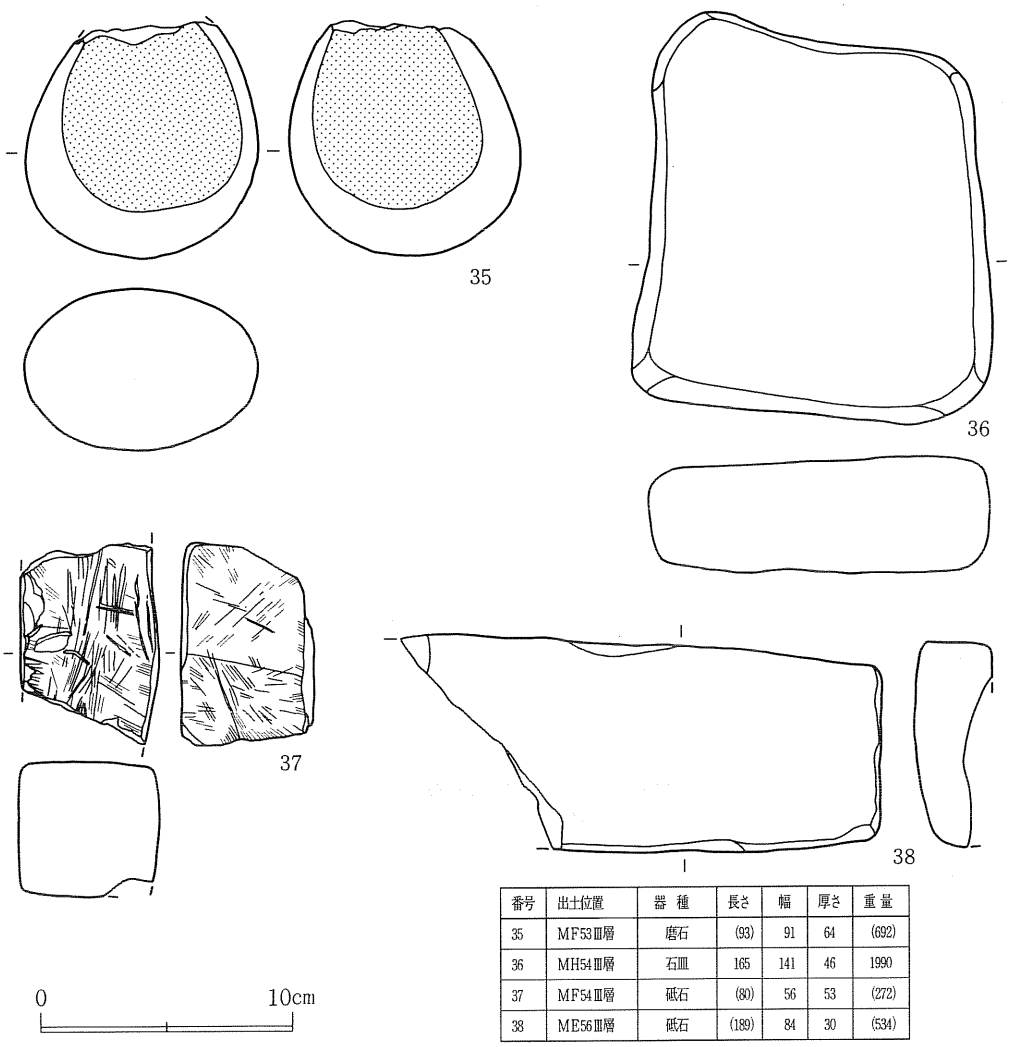
30は、無茎の石鏃で基部に抉入が加えられる。31は、いわゆる横型の石匙で、刃部は片面調整となっている。32、33は小型の剥片。34は基端が尖頭状を呈する磨製石斧で、佐原分類（註）に従うと、円刃、両凸刃となる。35は磨石で、磨面は２面、火熱を受け全体が赤化している。36は小型の石皿で使用面は図示した１面である。35、36とも顕著な磨面をなしていない。37、38は砥石で、37は４面を、38は２面を砥面としている。37は、１面（図示面正面）に顕著な擦痕が見られる。



番号	出土位置	器　種	長さ	幅	厚さ	重　量
30	MI47RQ110	石鏃	30	19	5	2.24
31	ME54RQ 28	石匙	58	72	11	31.9
32	MF76RQ178	剥片	34	25	12	11.9
33	MH46RQ 1	剥片	55	31	18	24.9
34	MG53RQ 17	磨製石斧	126	45	26	233.9

単位は長さ・幅・厚さがmm、重量はgである。

第23図　遺構外出土遺物(4)　石器(1)



番号	出土位置	器　種	長さ	幅	厚さ	重量
35	MF53Ⅲ層	磨石	(93)	91	64	(692)
36	MH54Ⅲ層	石皿	165	141	46	1990
37	MF54Ⅲ層	砥石	(80)	56	53	(272)
38	ME56Ⅲ層	砥石	(189)	84	30	(534)

単位は、長さ・幅・厚さがmm、重量はgである。

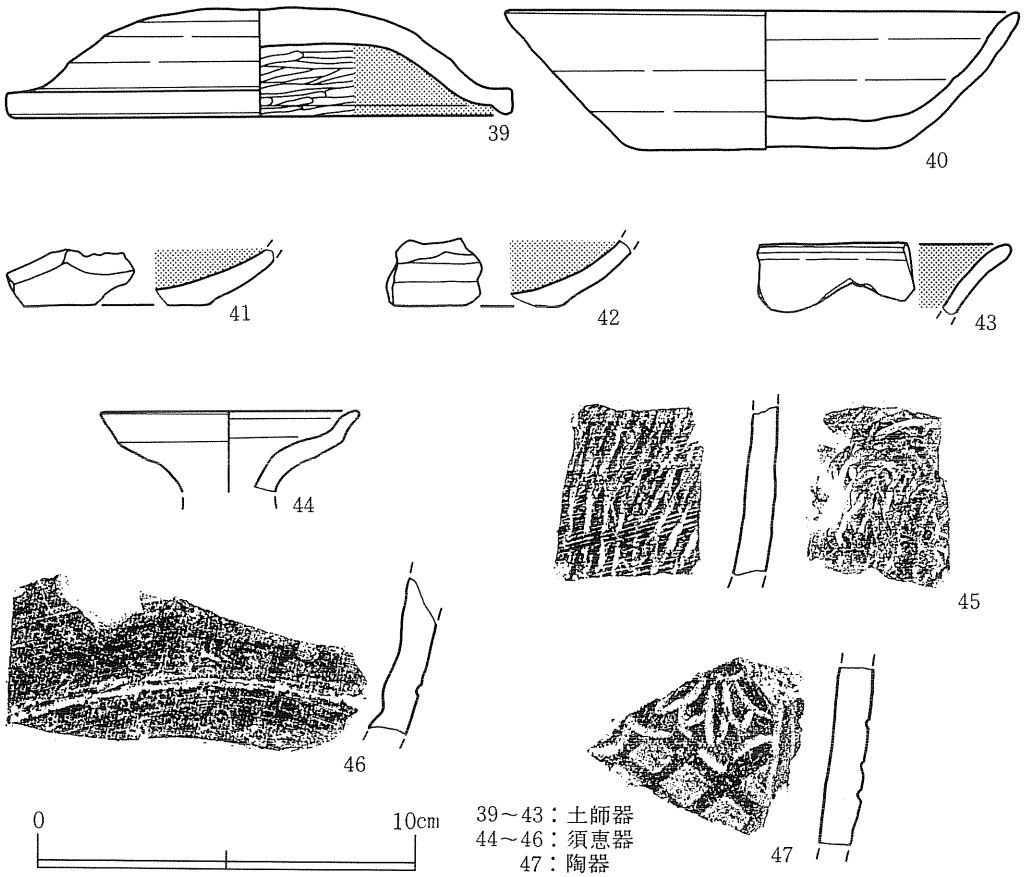
第24図　遺構外出土遺物(5)　石器(2)

3　土師器（第25図39～43、図版17）

土師器は、調査区北端部ＭＢ79グリッドを中心とした狭い範囲内で出土している。

39は、当初からつまみが作られていない蓋である。内外面とも丁寧なミガキがなされるが、外面頂部径26mmの範囲内は二次調整なく、切り離しの際の回転糸切り痕が残る。内面はミガキのち黒色処理されている。口径13.4cm、高さ2.9cmである。色調は、外面が明褐色、内面は黒色となっている。

40は、蓋に隣接する位置で出土した坏である。二次火熱を受け、全体に器肌が荒れている。底部には回転糸切り痕が見られる。口径13.6～14.2cm、底径6.8cm、器高3.7cmである。色調は、内外面とも赤褐色～明褐色を呈する。



第25図　遺構外出土遺物(6)　土師器、須恵器、陶器

41～43は、小破片であるが同一個体と思われる。41・42は底部、43は口縁部の破片である。底部には回転糸切り痕が残る。二次調整は、外面がナデ、内面はミガキのち黒色処理を施している。色調は、外面暗褐色、内面黒色である。

4　須恵器（第25図44～46、図版17）

須恵器は、調査区南部（ＭＧ52グリッド）と中央部（ＭＣ62グリッド）の２地点から３点（個体）のみの出土である。

ＭＣ62グリッド出土の44は小破片であるが、水瓶の口縁部と思われる。内外面ほぼ全面に灰白色系の自然釉がかかる。推定口径は6.6cmである。

ＭＧ52グリッド出土の45と46は、別個体ではあるが数10cm離れた位置で確認している。45は、甕で外面には平行タタキの後、カキ目状のロクロナデが、内面には青海波状のアテ具痕が見られる。46は、小型の壺か甕であろう。内外面にロクロナデが観察できる。２点とも色調は、暗灰～褐灰色を呈する。

５　陶器（第25図47、図版13）

陶器は数点出土しているが、図示したのは１点である。47は、ＭＥ56グリッド出土の火鉢の破片と思われる。胎土には径１～２mm程の砂粒を多く含むが焼成良好である。色調は赤褐色を呈するが土師器とは明らかに胎土は異なる。外面には、格子と花弁状の陰刻（スタンプか）が認められる。

註

佐原真「石斧論－横斧から縦斧へ－」『慶祝松崎寿和先生63歳論文集』1977（昭和52年）Ｐ53

第５章　自然科学的分析

第１節　^{14}C年代測定

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1993年11月１日に受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてＬＩＢＢＹの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代です。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が２σ以下のときは、３σに相当する年代を下限の年代値（Ｂ．Ｐ．）として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が２σ以下のときには、Modernと表示し、δ^{14}C％を付記してあります。

記

Code　No.	試料	年代（1950年よりの年数）
ＧａＫ－17533	炭化木　from　大松沢Ｉ遺跡 No.１　５ＯＭＺ－１　ＳＫ01　931008	1610 ± 100 Ａ.Ｄ. 340
ＧａＫ－17534	炭化木　from　大松沢Ｉ遺跡 No.２　５ＯＭＺ－１　ＳＪ02　931008	2000 ± 90 50 Ｂ.Ｃ.
ＧａＫ－17535	炭化木　from　大松沢Ｉ遺跡 No.３　５ＯＭＺ－１　ＳＪ10　931004	1670 ± 80 Ａ.Ｄ. 280
ＧａＫ－17536	炭化木　from　大松沢Ｉ遺跡 No.４　５ＯＭＺ－１　ＳＲ16　930929	3970 ± 90 2020 Ｂ.Ｃ.
ＧａＫ－17537	炭化木　from　大松沢Ｉ遺跡 No.５　５ＯＭＺ－１　ＳＫ31　931012	1100 ± 80 Ａ.Ｄ. 850

第２節　炭化材樹種同定

大松沢Ｉ遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大松沢Ｉ遺跡は、旭川左岸の手形山台地南西緩斜面上に位置し、旭川は南方で雄物川に合流する。雄物川水系沿いには、５面の河岸段丘が認められ、手形山台地はその中の下から３番目の中位面に相当する。

本遺跡では、発掘調査により、縄文時代晩期および平安時代の遺構・遺物が検出されている。これらのうち、時期不明の土坑からは、炭化材が検出されている。炭化材は、土坑内に充填されており、底部ほど包含率が高い。また覆土は全体的に締まりがなく、焼土や灰も認められる。今回の分析調査では、各土坑から検出された炭化材について樹種同定を行い、その樹種を明らかにする。

１．試料

試料は、４基の土坑（ＳＪ02，ＳＫ31，ＳＪ10，ＳＪ11）から検出された炭化材７点（Ｎｏ．１～７）である。このうち、ＳＪ10から検出されたＮｏ．５とＮｏ．６の試料は、同一袋中に一括して収められていた。そのため、本報告ではこの試料をＮｏ．５－６と表示する。

２．方法

試料を乾燥させたのち、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作製し、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

３．結果

同定結果を表１に示す。試料の内、Ｎｏ．２，３，５－６の各試料には、複数の樹種が認められたため、試料番号に小文字のアルファベットを付して、同定した全種類を表記した。炭化材には、マツ属複維管束亜属の一種、クリ、カツラ近似種、イネ科タケ亜科の一種が同定された。また、樹種不明の散孔材が２種類認められた。このうちの１種類は、今回の調査で最も多く認められたが、同定には至らなかった。そのため、本報告では、これらの不明散孔材を便宜上Ａ，Ｂに分け、その木材組織の特徴を記しておく。

同定された各種類の主な解剖学的特徴や現生種の一般的性質を以下に記す。なお、学名は「原色日本植物図鑑　木本編＜Ⅱ＞」にしたがい、一般的性質については「木の事典　第３巻～第７巻」（平井，1979-1980）も参考にした。

表１　炭化材同定結果

番号	検出遺構	樹　種　名	備　考
1	5OMZ-1 ＳＪ02	広葉樹（散孔材Ａ）	小枝、樹皮付き
2a	5OMZ-1 ＳＪ02	広葉樹（散孔材Ａ）	小枝、樹皮付き
2b	5OMZ-1 ＳＪ02	カツラ近似種	
3a	5OMZ-1 ＳＫ31	カツラ近似種	
3b	5OMZ-1 ＳＫ31	イネ科タケ亜科の一種	桿、桿分枝
4	5OMZ-1 ＳＫ31	広葉樹（散孔材Ａ）	小枝、樹皮付き
5-6a	5OMZ-1 ＳＪ10	クリ	
5-6b	5OMZ-1 ＳＪ10	マツ属複維管束亜属の一種	
5-6c	5OMZ-1 ＳＪ10	イネ科タケ亜科の一種	桿、地下茎、桿分枝
5-6d	5OMZ-1 ＳＪ10	広葉樹（散孔材Ａ）	小枝、樹皮付き
5-6e	5OMZ-1 ＳＪ10	広葉樹（散孔材Ｂ）	
7	5OMZ-1 ＳＪ11	クリ	

・マツ属複維管束亜属の一種（Pinus subgen. Diploxylon sp.）　　マツ科

早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく、樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、分野壁孔は窓状、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められ、単列、１～15細胞高のものと水平樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

複維管束亜属（いわゆる二葉松類）には、アカマツ（Pinus densiflora Sieb. et Zucc.）、クロマツ（P. thunbergii Parlatore）、リュウキュウマツ（P. luchuensis Mayr）の３種がある。アカマツとクロマツは、本州・四国・九州に分布するが、クロマツは暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽させて来た。リュウキュウマツは琉球列島特産である。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc）　　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材などの用途が知られている。

・カツラ近似種（cf. Cercidiphyllum japonicum Sied. et Zucc）　　カツラ科

散孔材で、管孔は単独または２～３個が複合、分布密度は高い。晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ型、１～２細胞幅、１～30細胞高。以上の特徴からカツラと考えられるが、確定には至らず近似種とした。

カツラは北海道から九州に自生する落葉高木である。カツラ属にはこのほか、本州北中部の亜高山帯に分布するヒロハカツラ（C. magnificum（Nakai）Nakai）がある。カツラの材はやや軽軟で、割裂性は大きく、加工は容易、強度・保存性は低い。大径木が多く、欠点が少ないため、各種の道具・器具・木地・家具・建築・彫刻材などに用いられる。

・広葉樹（散孔材Ａ）

環孔性を帯びた散孔材で、道管は晩材部へ向かって漸減させる。道管は、単穿孔を有する。放射組織は、直立細胞のみで構成された単列の組織と、異性Ⅲ～Ⅱ型、４細胞幅前後、30細胞高前後の組織とがある。

・広葉樹（散孔材Ｂ）

小径の道管が年輪界に一様に散在する散孔材。道管は単穿孔を有している。放射組織は、異性Ⅱ型、１～３細胞幅、１～20細胞高。

・イネ科タケ亜科の一種（Gramineae subfam. Bambusoideae sp.）

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。しかし、検出された試料の形態等からササ類と考えられる。また、桿が密に分枝している部分の形態がチシマザサに似ることから、本試料もチシマザサの可能性がある。

４．考察

同定した試料が１点のＳＪ11を除き、いずれの土坑も複数の樹種で構成されていることが明らかとなった。土坑から検出される炭化材には、燃料材、廃棄物、防湿・防菌等の用途が考えられる。今回の炭化材については、検出された土坑の覆土に締まりがなく、焼土や灰が認められることから、土坑内での燃焼による可能性がある。試料が、土坑内で燃焼によって得られた炭化材とした場合、これらの炭化材は燃料材もしくは製炭された木炭等の可能性が考えられる。

検出された炭化材を見ると、最も多かった広葉樹（散孔材Ａ）はほぼ全ての試料が小径で、樹皮がついており、保存状態は良好であった。また、その他の試料にも保存状態が良好なものが多い。このことを考慮すると、土坑は炭窯で、炭化材は製炭された木炭の可能性がある。しかし、検出された炭化材は、いずれも小片で、中には通常木炭や燃料材として使用しないタケ亜科の地下茎等も含まれている。そのため、これらの炭化材が製炭された木炭や燃料材とは断定できない。

今回のような例は、全国的にも少なく、現時点で炭化材や土坑の用途を推定することは困難

である。今後同様の事例を増やし、資料の蓄積を待って再検討する必要があろう。また、今後同様の調査を行う際には、埋積物の状況および埋積過程の解明、埋積物を対象とした様々な分析等を行い、総合的に遺構の用途や性格を把握する必要があろう。

＜引用文献＞

平井信二（1979－1980）木の事典　第３巻～第７巻．かなえ書房．

北村四郎・村田　源（1979）原色日本植物図鑑　木本編＜Ⅱ＞．545Ｐ．，保育社．

第６章　まとめ

大松沢Ⅰ遺跡は、1974年に発見周知された遺跡である。その後、1987年の秋田市教育委員会による遺跡詳細分布調査、1992年の秋田・昭和線地方道改良事業に伴う遺跡範囲確認調査において、縄文時代中期末～後期初頭、晩期後葉の遺物散布地として把えられていた。

1993年の本調査の結果、上記時期の出土遺物のほかに、僅かではあるが、縄文時代後期後葉、平安時代、現代の遺物が確認できた。

検出遺構は、縄文時代晩期の土器埋設遺構１基、円形（弧状）配置のピット２基、現代の掘立柱建物跡２棟、溝状遺構１条、柱穴列１列、竪穴遺構１基、土坑４基、時期不明の住居跡１軒、竪穴状遺構１基、掘立柱建物跡１棟、溝状遺構３条、柱穴列１列、土坑11基、焼土遺構２基及び柱穴状ピット約450基である。時期不明の遺構は、縄文時代、平安時代及び中・近世か、現代のいずれかと思われる。

本章では、発掘調査及び以前に得られた資料、周辺の遺跡の情報を総合して、時代・時期を追って大松沢Ⅰ遺跡の動静をまとめてみる。

１　縄文時代

中期

出土遺物で判断する限り、大松沢Ⅰ遺跡に最初の足跡を残したのは、中期の縄文人のようである。調査区北部で数点の該期の土器片が得られており、1987年の秋田市による分布調査では、調査区中央部の東方緩斜面（今回の調査範囲外）で中期末～後期初頭の土器片が出土している。形態的に見て、縄文時代と考えられる住居跡（ＳＩ21）を検出しているが、時期特定はできず、この地に居を構えていたかどうかは不明である。北側の沢（治郎沢）を隔てた北西台地上には同時期の高梨台遺跡があり、同遺跡（集落）との関連での位置づけができそうである。

後期後葉

いわゆる瘤付土器が１片、調査区中央部から出土している。しかし他に該期の遺物なく、詳細不明である。

晩期後葉

縄文時代晩期後葉、この時期が大松沢Ⅰ遺跡においての１つのピークとなる。胎土に粒径の大きい砂粒を多く含んでいる土器（第Ⅰ群２類ｃ種）は、調査区ほぼ全域で薄くではあるが分布している。この土器は同じ胎土を有するＳＲ09、ＳＸ16出土土器から判断して時期同定を行っている。従って該期の遺構は、調査区北部の土器埋設遺構（ＳＲ09）と円形（弧状）配置のピット（ＳＸ16）及び、遺物の出土はなかったが、形態的類似性からＳＸ20もここに含まれるであ

ろう。

土器埋設遺構は一般的な理解では、住居跡等の炉としての使用でない場合には、“墓”としての機能を想定している例が多いようである。また円形（弧状）配置のピットは、中央の小土坑が人為的に埋められている。このことから、両者ともこの時期における“墓”であった可能性が高いのではないか。またＳＲ09とした土器埋設遺構も規則性には欠けるが、柱穴が巡っていたとも読める（第6図右上参照）。

これらのことから、想像を大にして言えば、この時期のこの種の遺構は、調査区北部の緩斜面から狭い平坦面の場において、中央の埋葬施設（土器、土坑、その他）の周囲に何らかの上屋施設を有する“墓”が2～3・4ｍの間隔で点在する集団墓地であった可能性が高い。

2　平安時代～中・近世

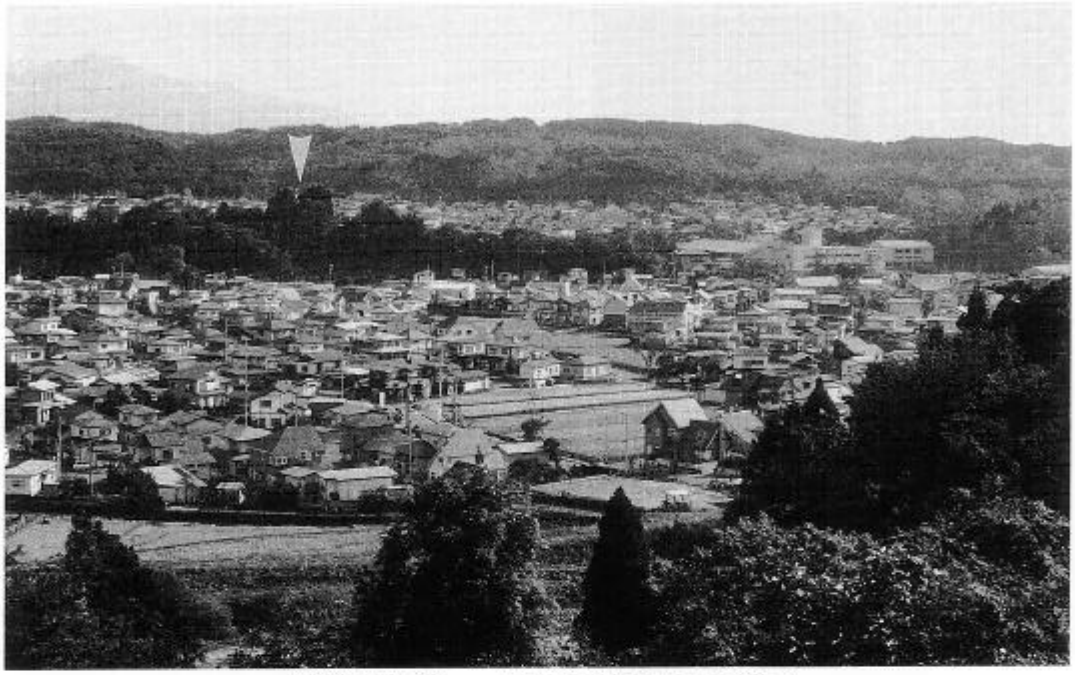
縄文時代以降、先人の足跡は平安時代まで途絶える。この時期、おそらく9世紀には、再びこの地に人々が現れる。調査区中央～南部では須恵器が、北部では土師器がそれぞれ出土しているが、明確に該期の遺構は確認できていない。ただ形態的にＳＫＩ04竪穴遺構は、該期の構築と考えられよう。また中央部のＳＪ02・03についても遺物の出土はなかったものの、土師器を焼成した窯であった可能性が考えられる。この時期は、本遺跡の北東約250ｍに所在する手形山窯跡、治郎沢を挟んだ北側の台地上に立地する中山台遺跡（須恵器が採集）との関係が注目されるが、特に調査の行われている前者との繋がりをもつであろう遺構・遺物は確認できなかった。

一方北部のＳＪ10・11（炭窯か）あるいはＳＫＩ04と重複関係にあるＳＢ24掘立柱建物跡は、平安時代もしくはそれ以降の中・近世の構築かもしれない。

3　現代

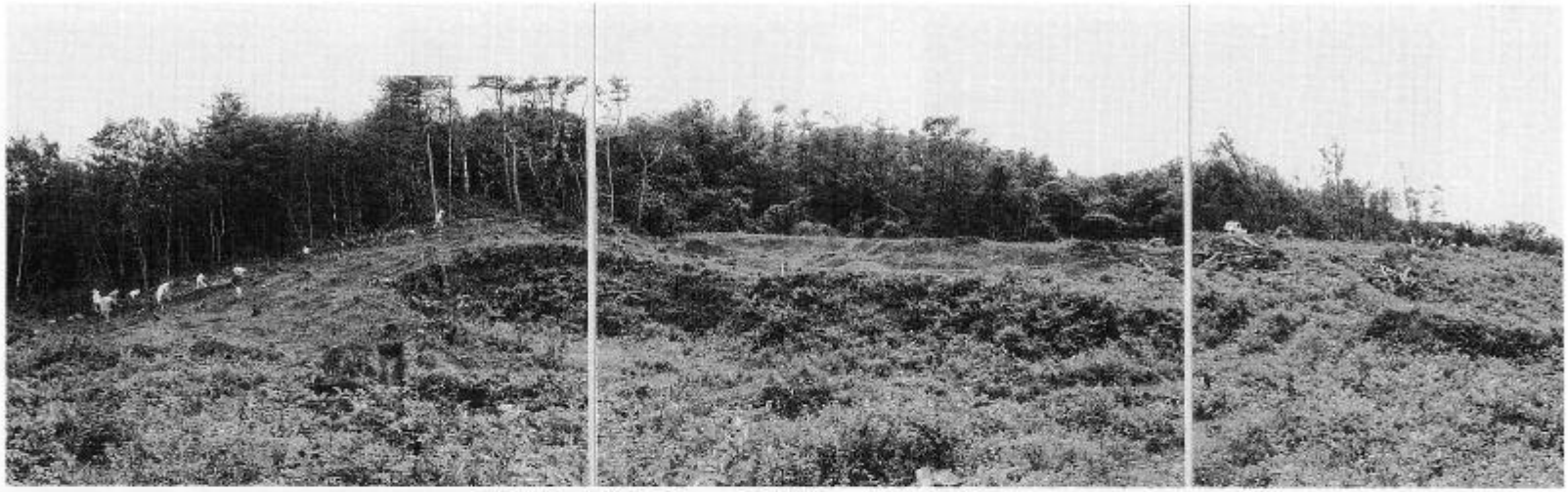
現代、戦中～戦後と想定されるが、調査区中央部を中心に原野を開墾して畑耕作を行っていたようである。耕作に伴う作業小屋の構築とゴミ穴の掘り込み等が、掘立柱建物跡、土坑として確認できたものと思われる。

図版1

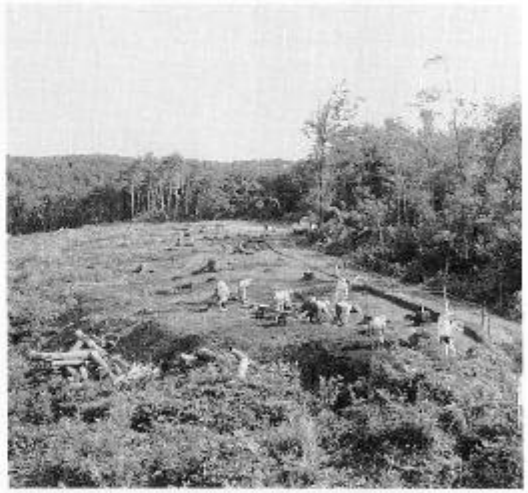


遺跡遠景（西→、天徳寺平和公園より望む）

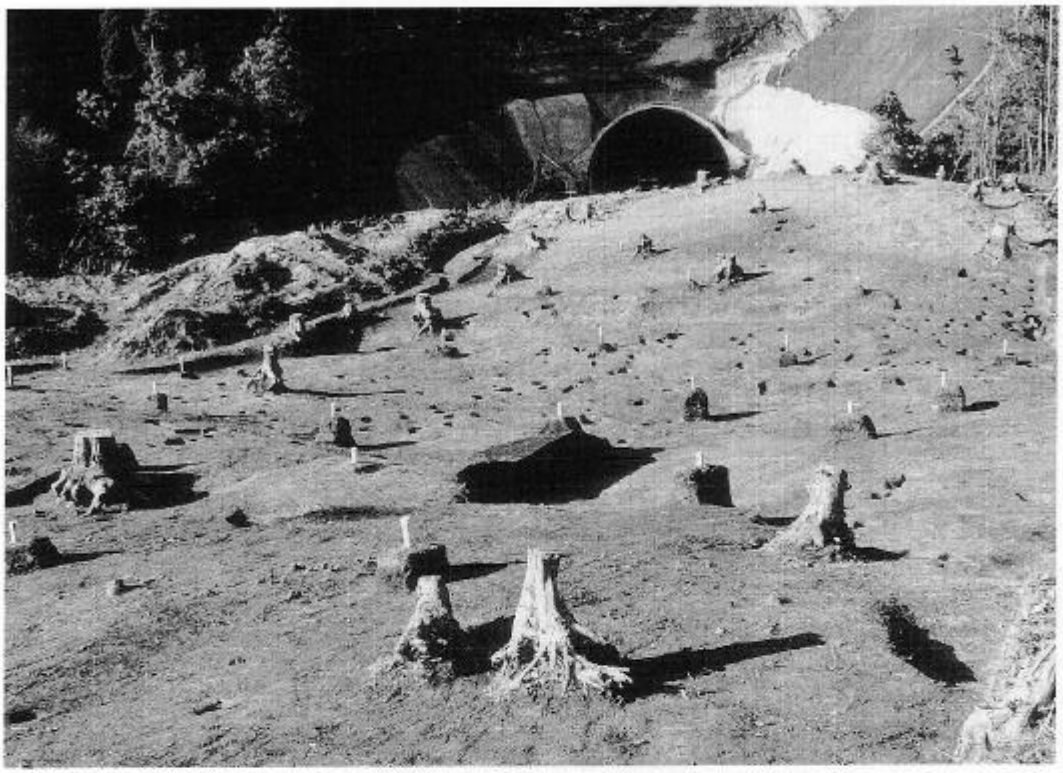
遺跡全景（北西方上空より）



調査前の状況（西→、調査区内の枝葉除去作業）



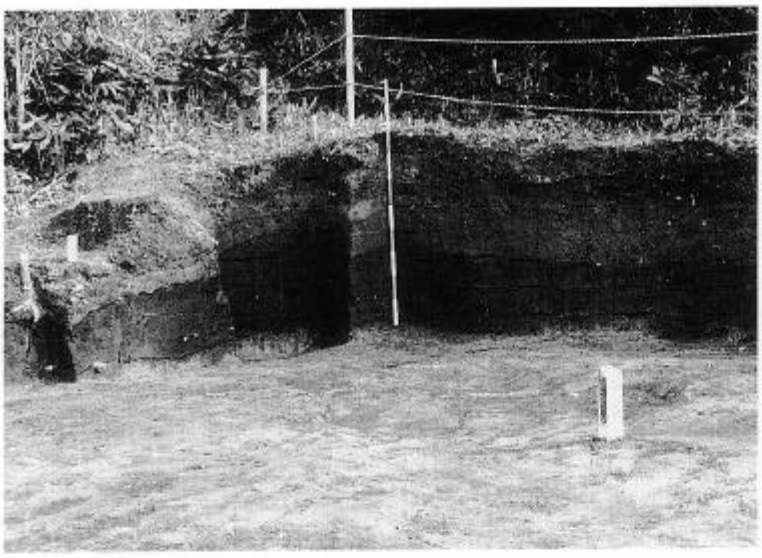
調査風景（左：北部、南→、中：中央部沢内、北東→、右：南部、南→）



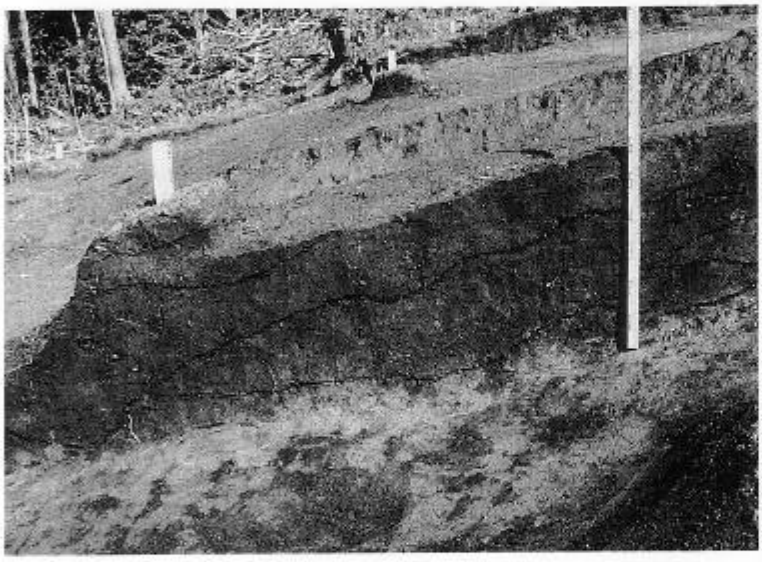
調査後の状況（北部、南→）

調査後の状況（南部、北→）

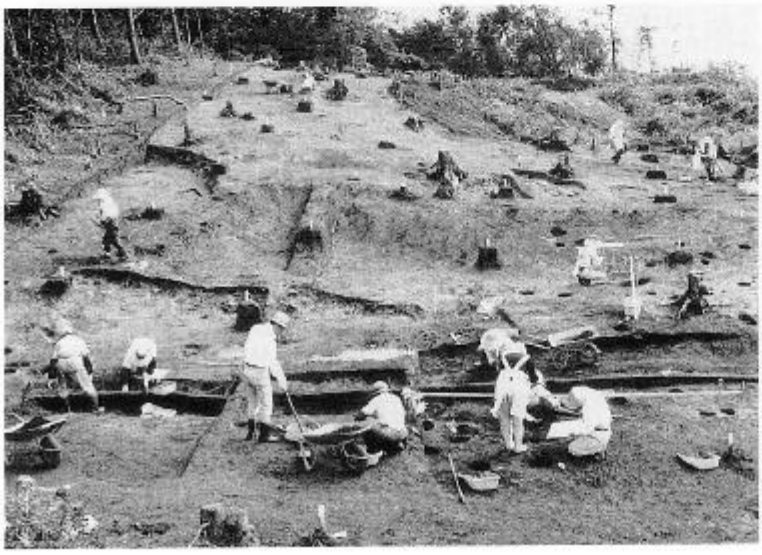
図版4



基本層序
（調査区中央部、北西→）

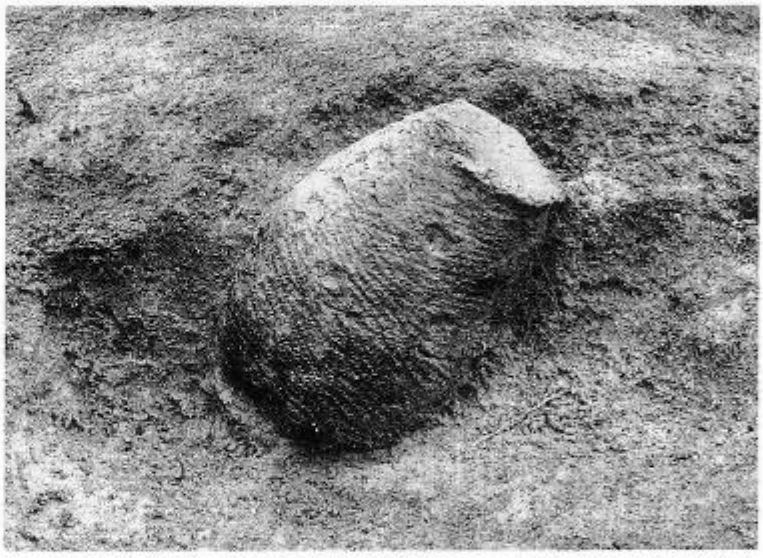


基本層序
（調査区北部、西→）

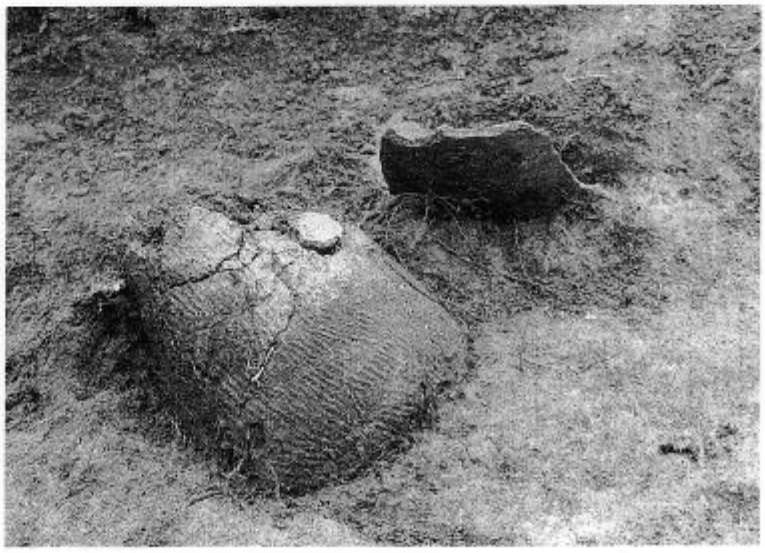


調査風景
（北部、北→）

ＳＲ09土器埋設遺構
（確認状況、北→）

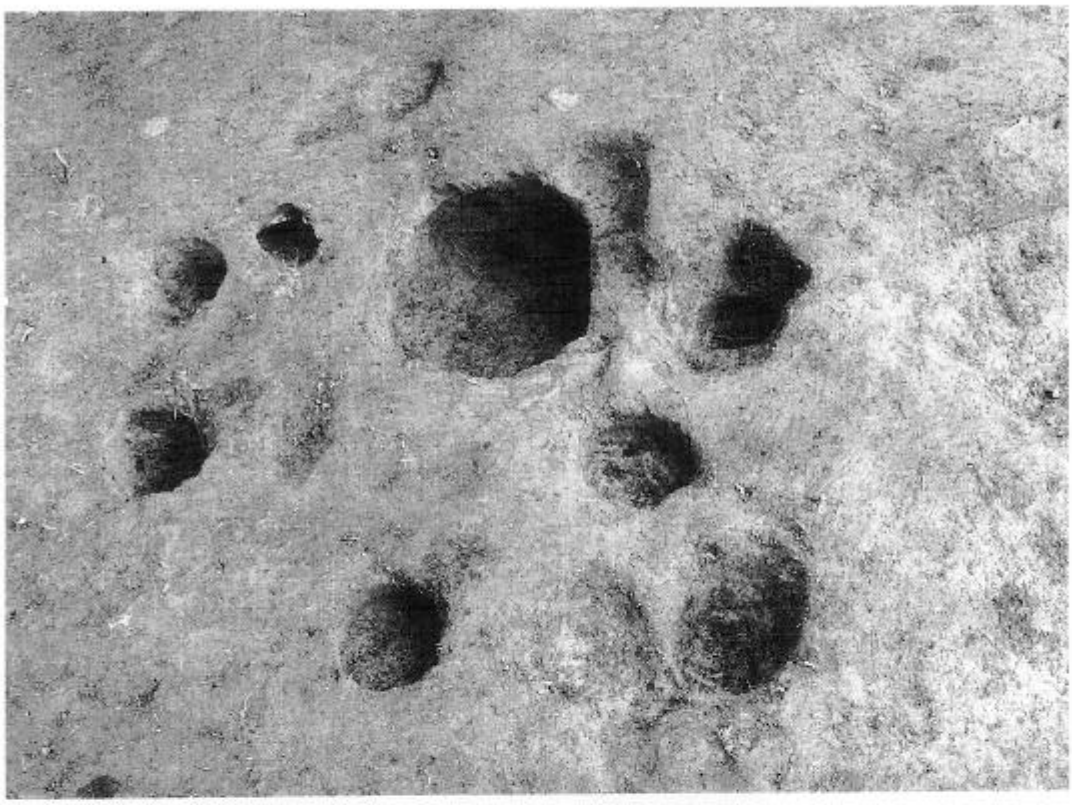


同上（倒立して埋められている、北→）

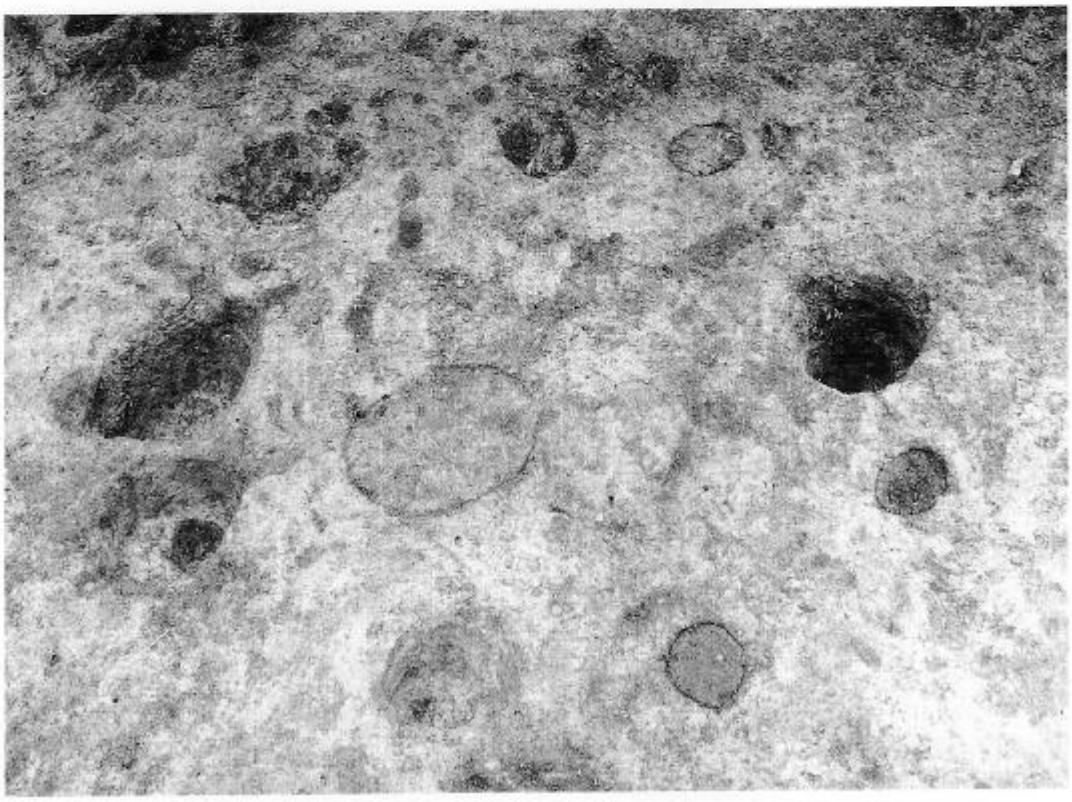


縄文土器出土状況（北→）
手前：第22図27
奥：第20図14

図版6

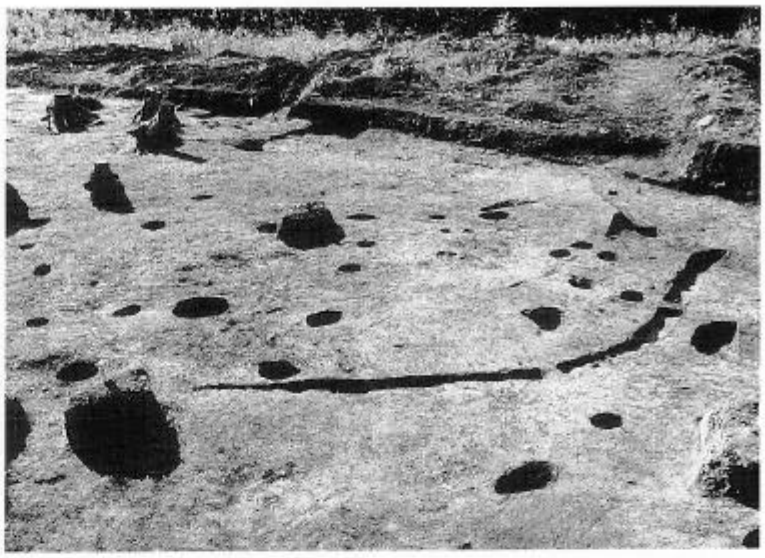


ＳＸ16（完掘、西→）



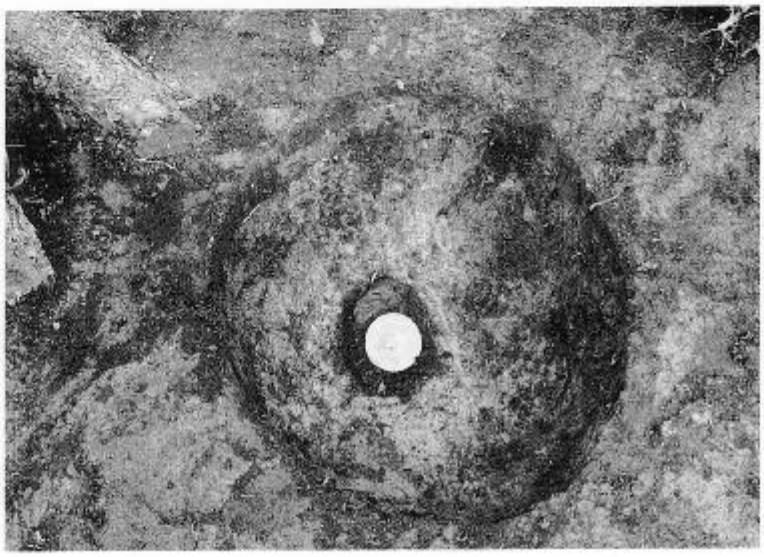
ＳＸ20（中央の小土坑未掘、北西→）

図版7



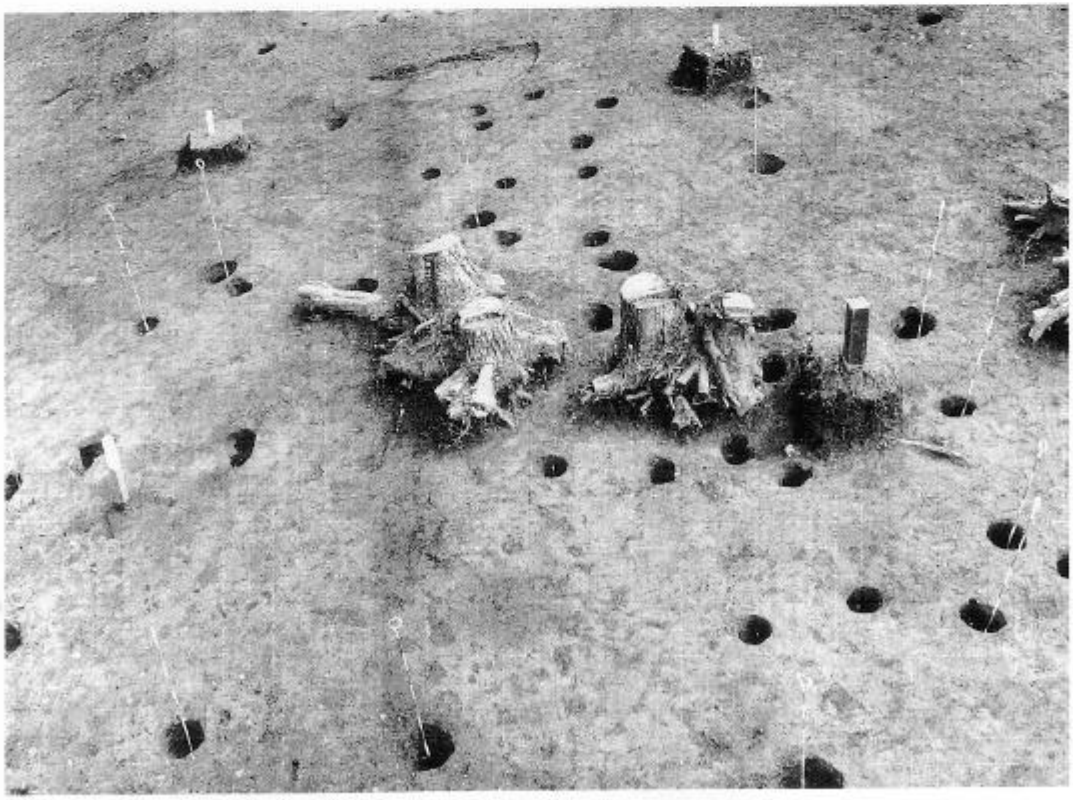
ＳＢ38、ＳＤ33、ＳＡ42など
（北東→）

ＳＫ06（南西→）
黒く見えるのが瓦質の消壺

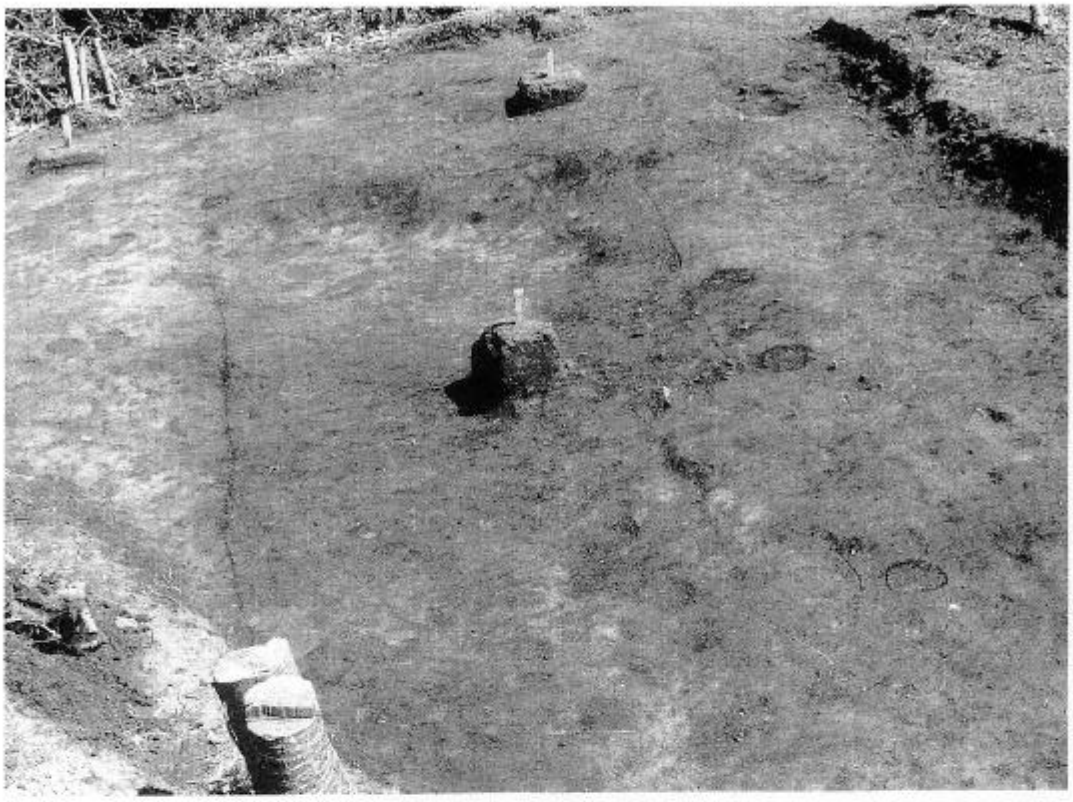


ＳＫ35（南→）
坑内中央に小坏が正立している

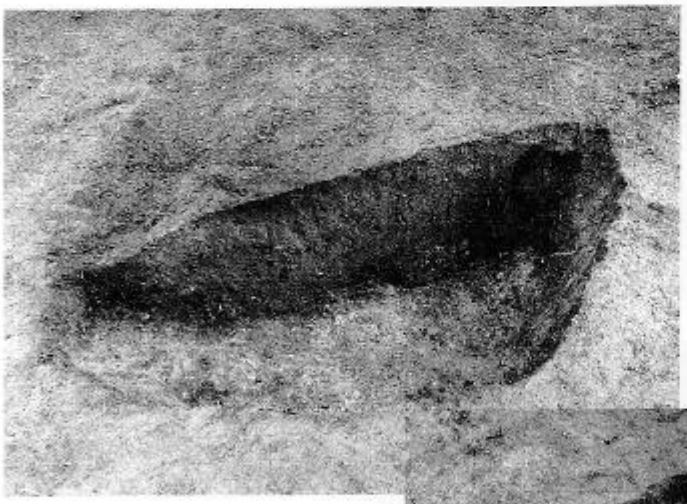
調査区北部の遺構 ＳＩ21、ＳＫＩ04、ＳＤ08・14など(北→)



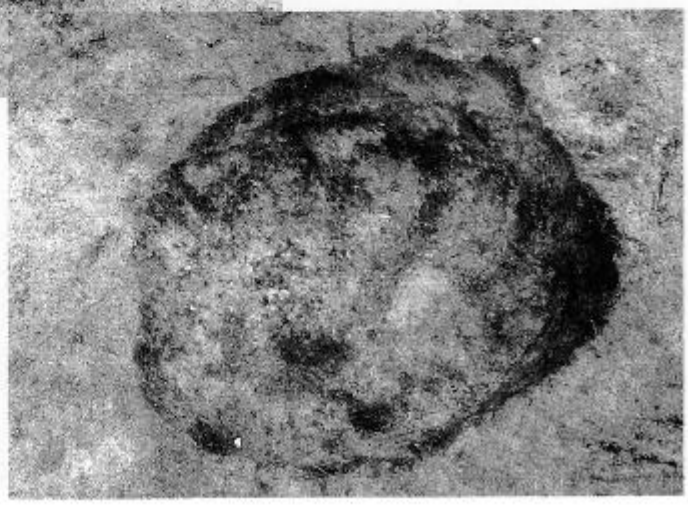
調査区北西部、柱穴群（住居跡か）（西→）



ＳＫＩ04確認状況（西→）

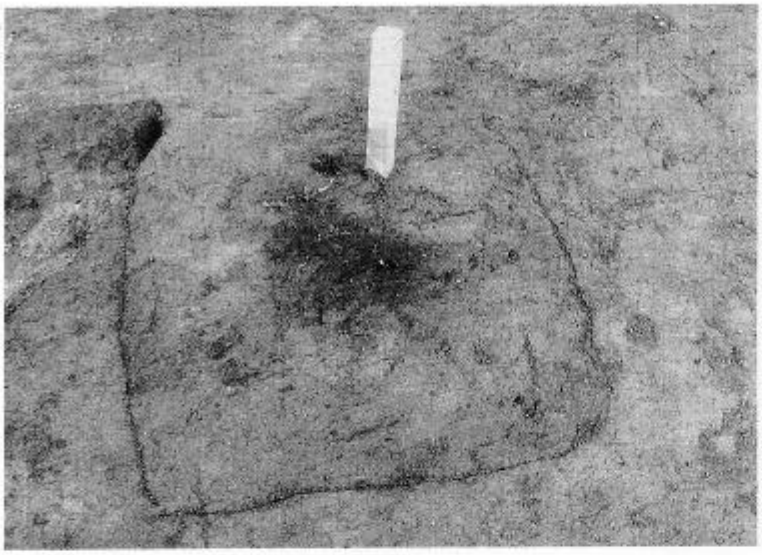


ＳＪ10（土層断面、西→）



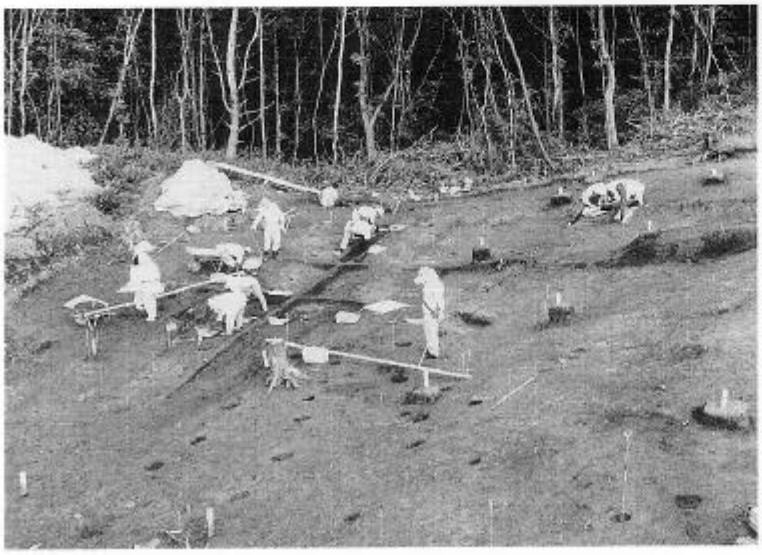
ＳＪ10（完掘、北西→）

図版10

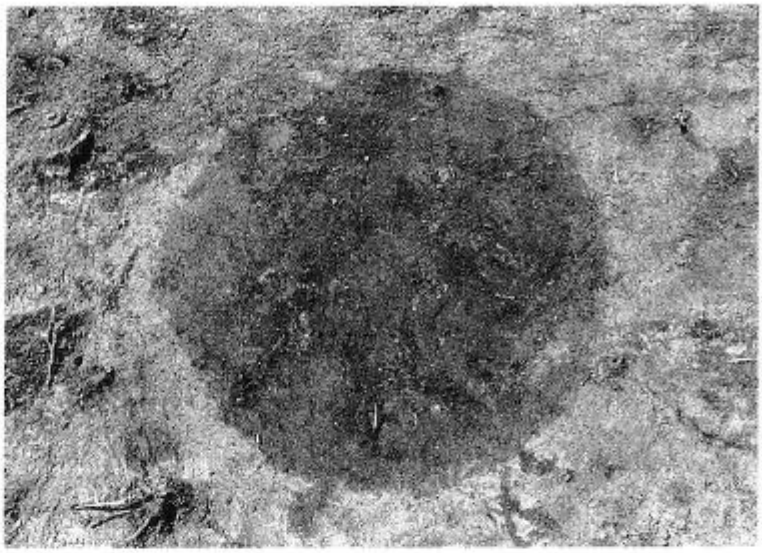


ＳＪ11（確認状況、西→）

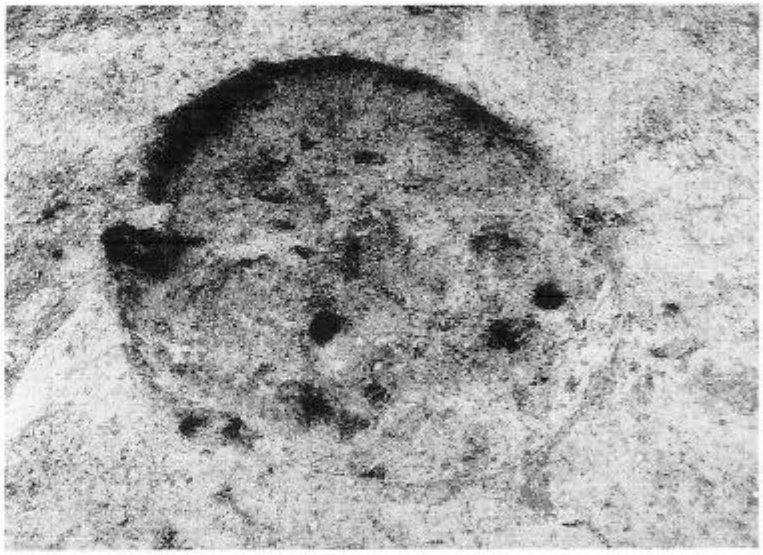
ＳＪ11（完掘、北→）



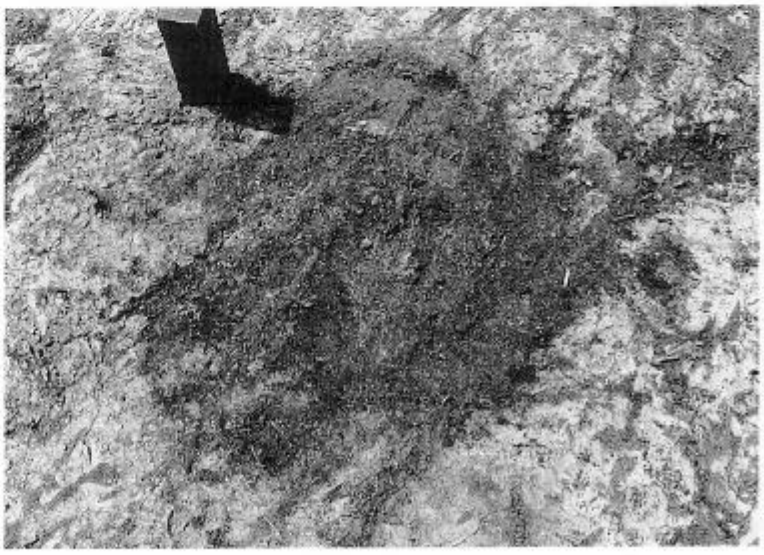
調査風景（西→）
ＳＤ08精査、実測中



ＳＪ02（確認、北→）

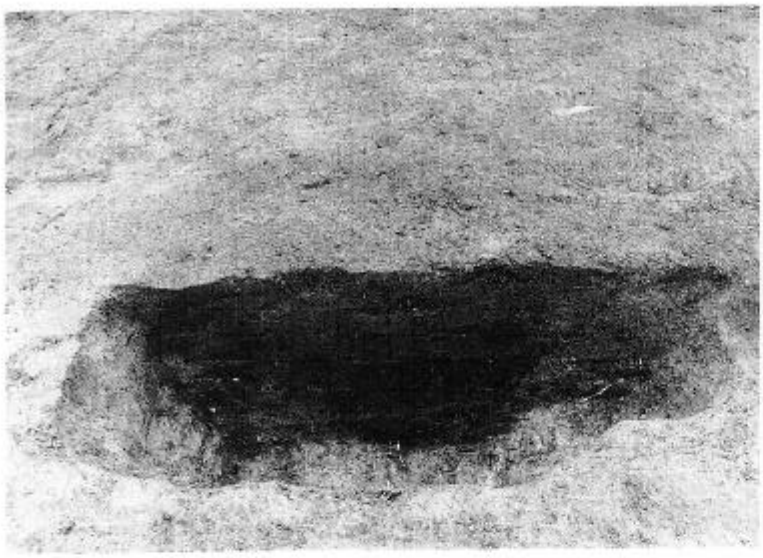


ＳＪ02（完掘、東→）

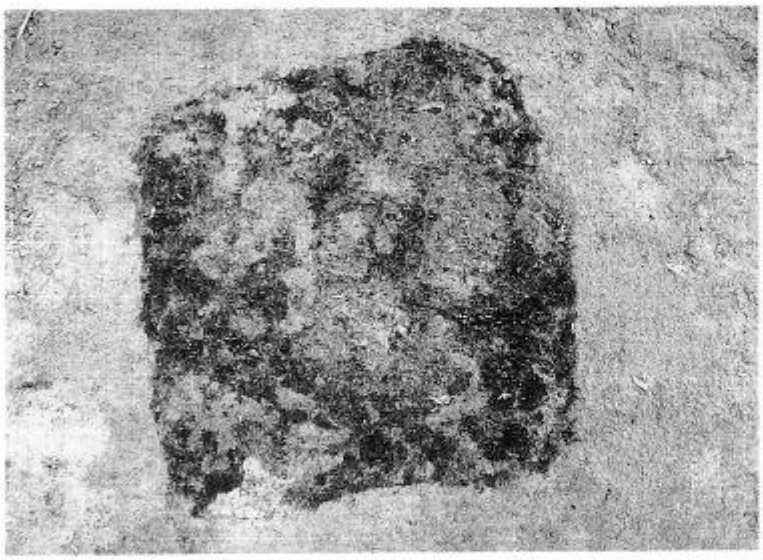


ＳＪ03（確認、南→）

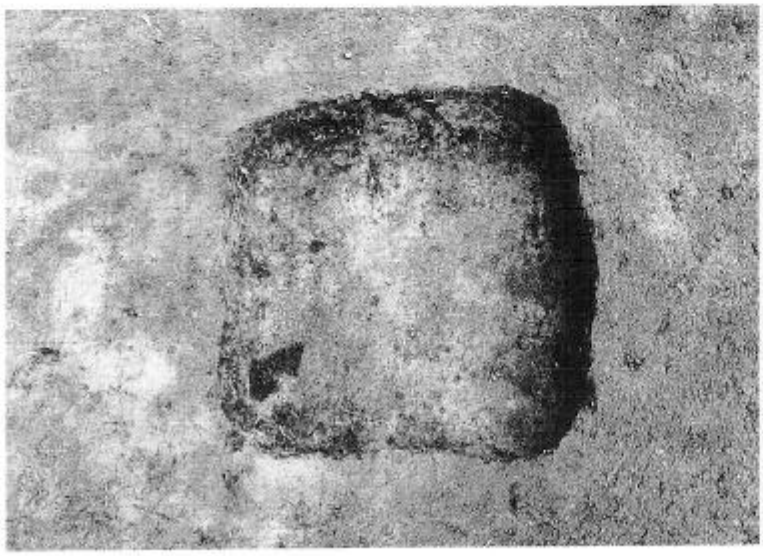
図版12



ＳＫ01（土層断面、北→）



ＳＫ31（確認、西→）

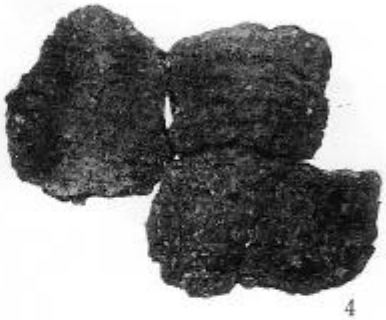


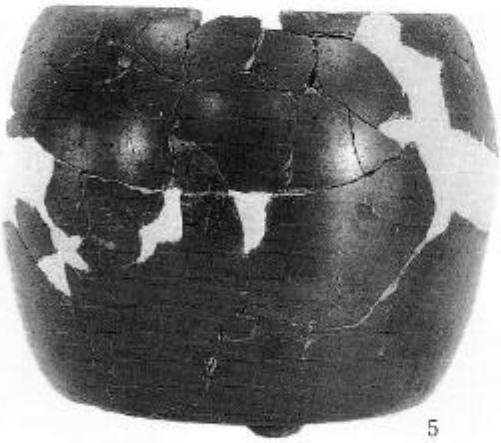
ＳＫ31（完掘、西→）

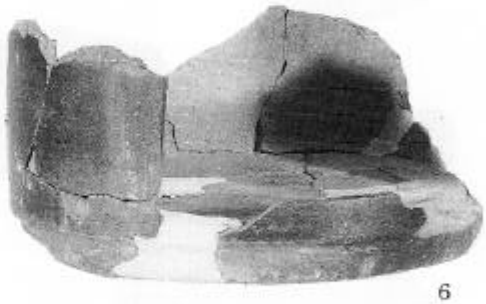
1

2

3


4


5

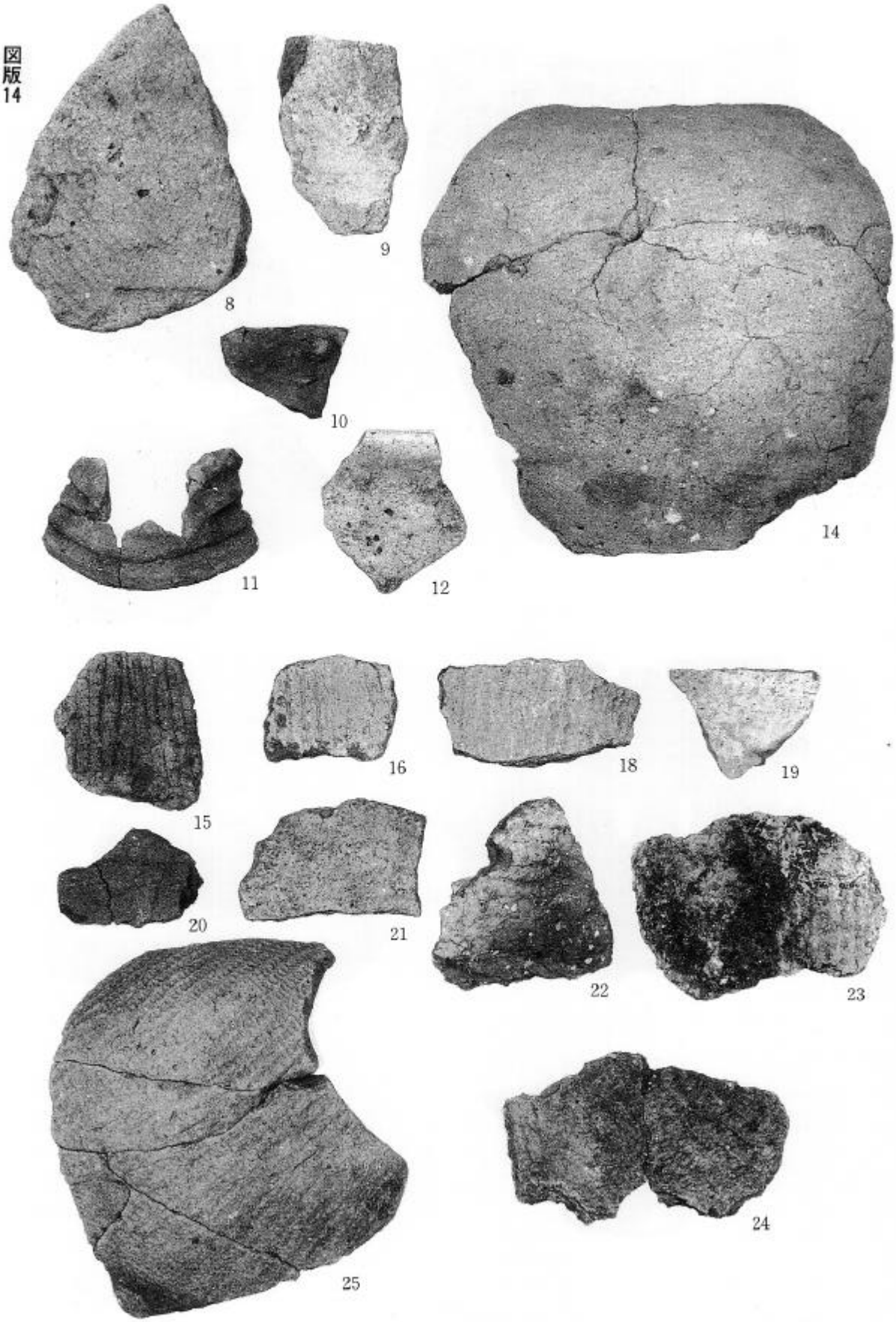

6

7

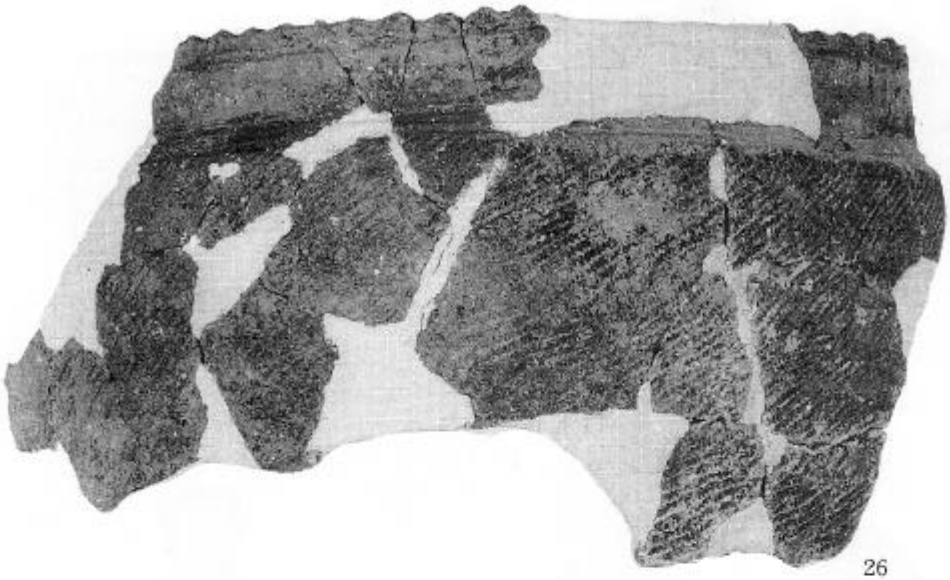
47

遺構内出土遺物（47を除く）

図版14

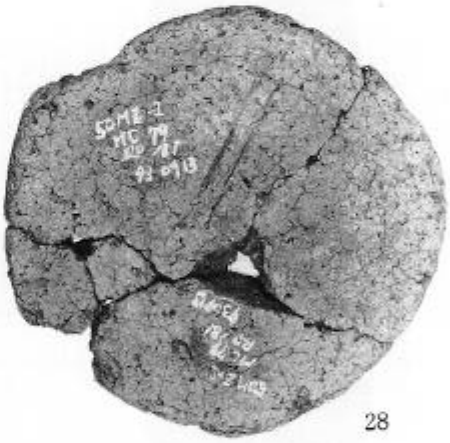


遺構外出土遺物(1)　縄文土器



26

27

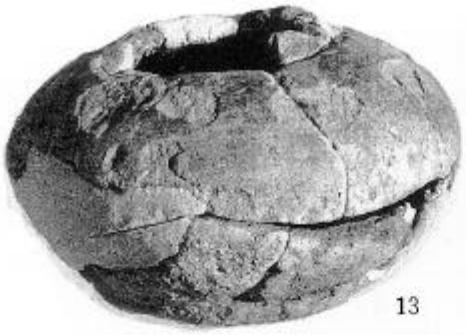


28

29

遺構外出土遺物(2)　縄文土器

図版16


13

17

34

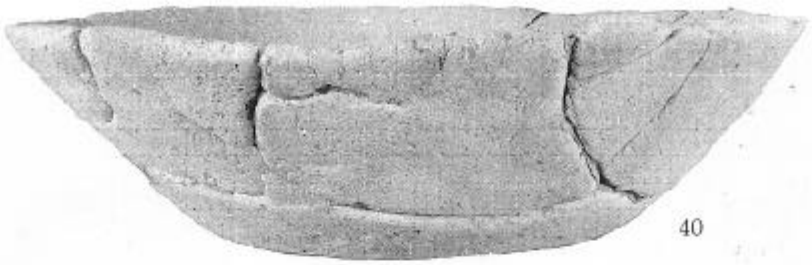
30

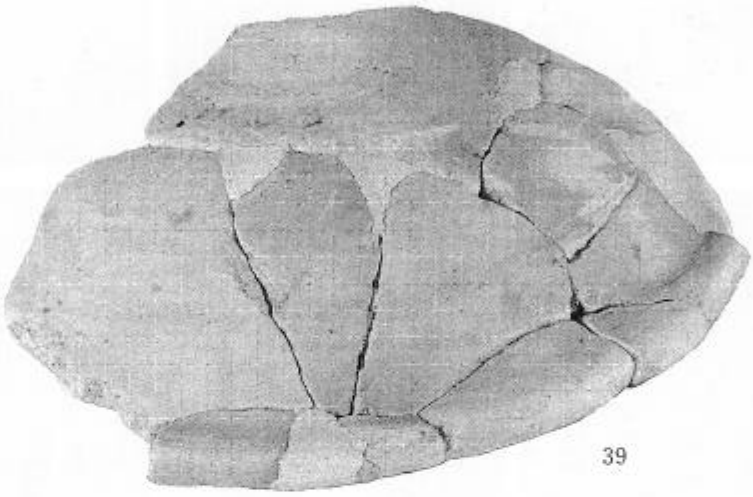
31

32

33

遺構外出土遺物(3)　縄文土器、石器


40


39

41

42

43

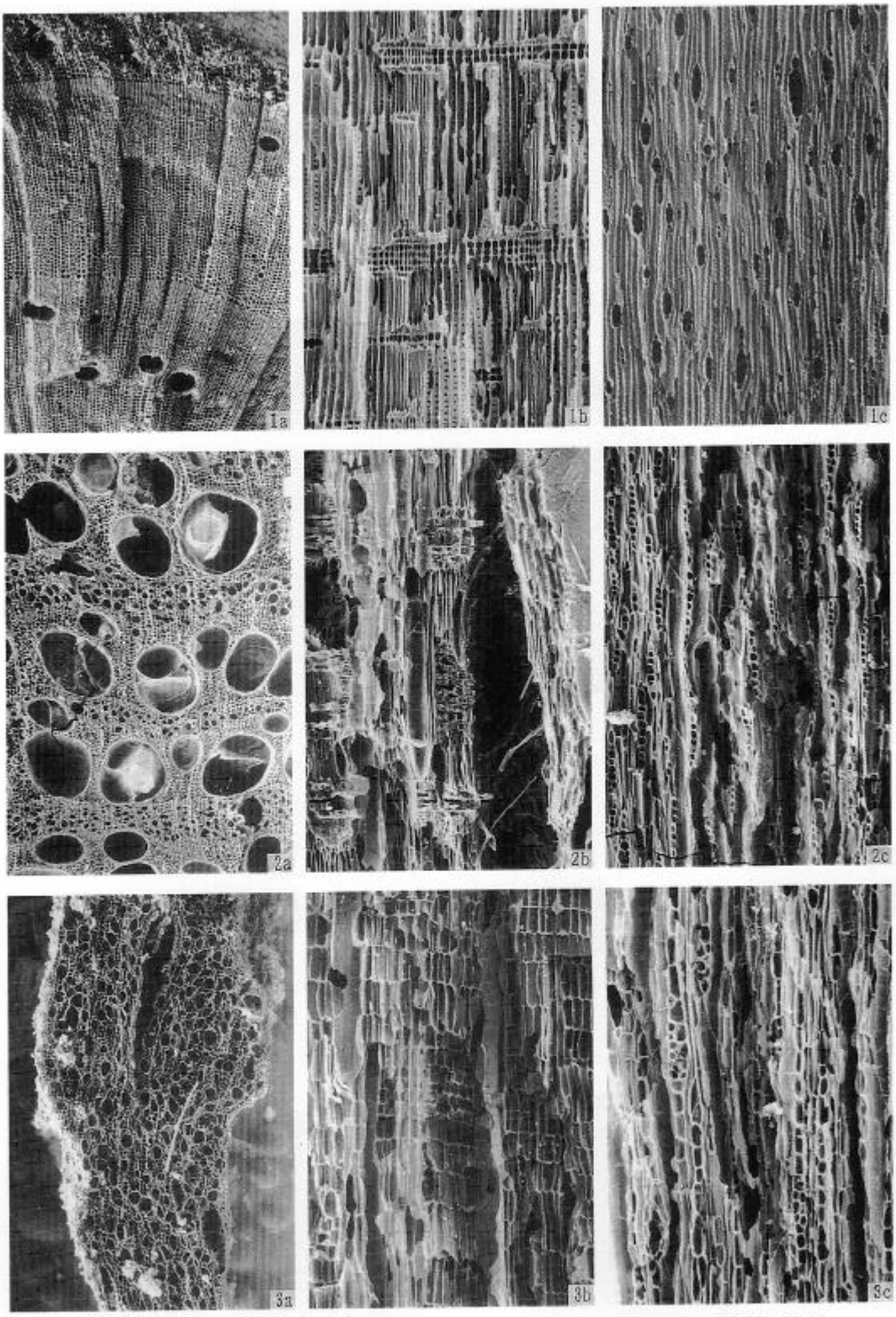
44

45

46

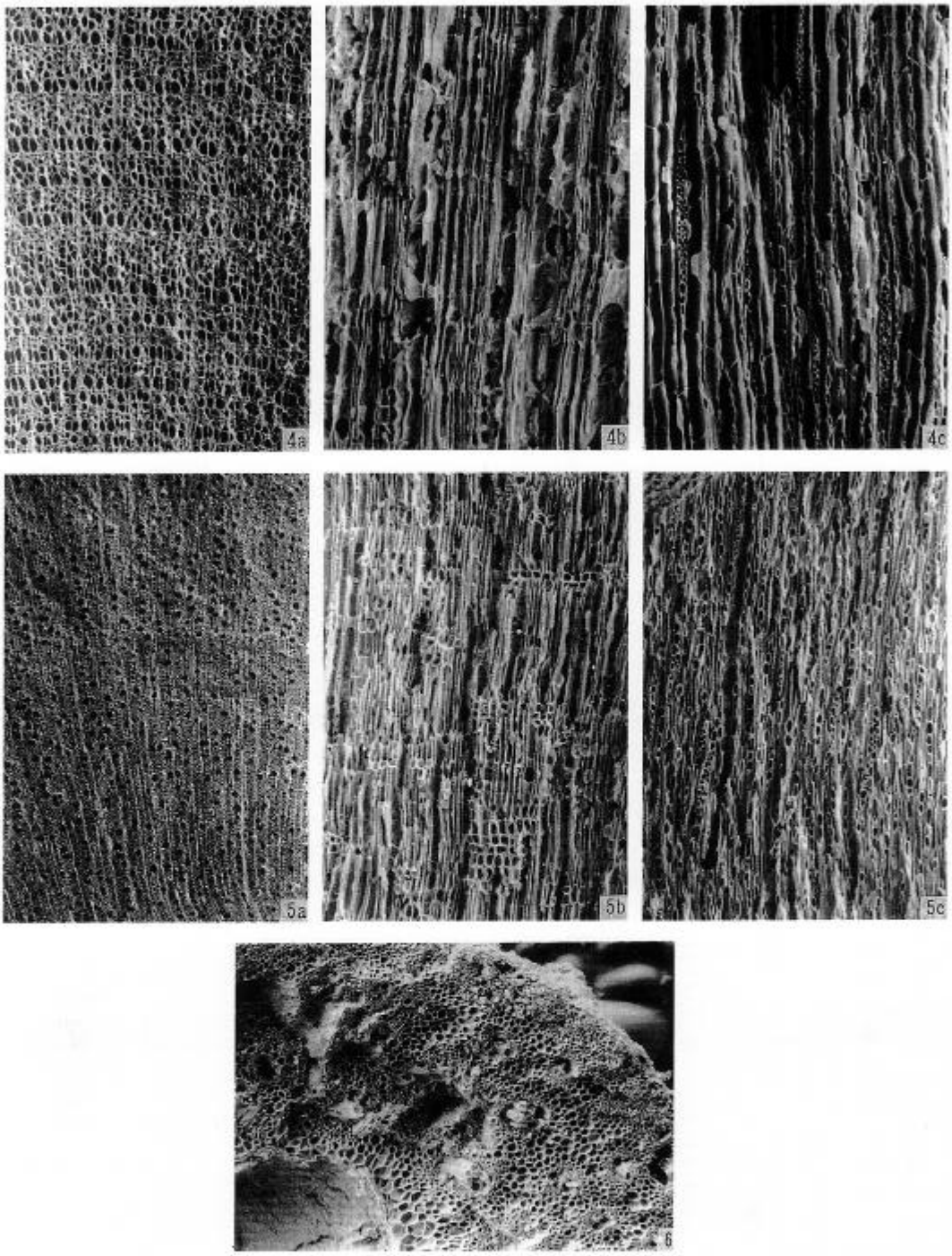
遺構外出土遺物(4)　土師器・須恵器

図版18



1. マツ属複維管束亜属ノ一種（No.5-6b）
2. クリ（No.7）
3. カツラ近似種（No.3a）
a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a
200μm：b, c



4.広葉樹　散孔材A（No.5-6d）
5.広葉樹　散孔材B（No.5-6e）
6.イネ科タケ亜科の一種（No.5-6c）
a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a.b
200μm：b.c